

プロローグ

1983年6月、教育界の鬼門といわれる、非行少年、家庭内暴力、登校拒否児を更正させ、日本国中をあつといわしめた戸塚ヨットスクール校長・戸塚宏氏及びコーチ12人が傷害致死容疑で愛知県警半田署に逮捕された。時あたかも中・高校生による校内・家庭内暴力がはびこり、いじめ、登校拒否児も増加の一途を辿っていた。子供の非行が家庭を崩壊させる様を描いた「積み木くずし」がベストセラーとなったのもこの年である。

逮捕劇はまさにカタストロフィーであった。一時期は教育界の救世主とまでてはやされた戸塚氏ではあったが、逮捕直前には世間からまるで殺人鬼扱いされるまでになっていた。マスコミは一斉に戸塚氏とスクールの批判記事を連日連夜流し続け、戸塚氏及びコーチ等を逮捕までの道程を余儀なく歩ませたのである。それは『現代の魔女狩り』といった観さえであった。しかし、それら一連の報道では、同スクールによって救われた子供や家族の存在は全くといっていいほど無視されていたのである。

戸塚氏は何のために非難、誤解を受けやすいスパルタ教育を行っていたのか。その教育手段は本当に糾弾されるに値するものであったのか。この逮捕は正当なのであろうか。こうした疑問を抱いた者も少なからずともいたはずだ。マスコミの一方的な報道に翻弄されその本質が見えなくなってしまったというケースもあるだろう。いずれにしても、ここでは、この問題を冷静に見渡すために戸塚ヨットスクール出現の背景に簡単に触れておかなければなるまい。

この家庭内暴力、登校拒否といった問題は70年代に入った頃から急激に現れ始めた事象である。もちろん、関係省庁、教育者、専門家たちは、手を変え品を変え対策を練り、実行した。しかし、正常化への兆候は一向に現れなかった。これには教育に携わってきた専門家たちも、さすがにお手上げの状態に陥っていた、いや、それは現在も続いている。そうした社会状況下に一石を投じたのが戸塚氏率いる戸塚ヨットスクールなのである。愛知県知多郡美浜町に設けられたこのヨットスクールの合宿では、それまで手のつけようがなかった問題児たちが徹底的に鍛えられ、続々と更正していった。その成果は当時のマスコミからも称賛され、度々報道もされた。

そもそも、戸塚ヨットスクールは、昭和50年に開催された沖縄海洋博を記念して催されたサンフランシスコ—沖縄間の太平洋単独横断ヨットレースで優勝した戸塚宏氏が昭和51年に開校したスクールである。このレースにおいて氏は太平洋を41日14時間33分という驚異的な記録で横断した。その方法というのがまた超人的であった。舵と帆から目を離す時間を最小限に留めるために目覚まし時計をセットして15分ごとに目を覚まし、舵と帆を調整してはまた眠りにつくという離れ業を見事にやっていたのである。通算しても1日の睡眠は4時間だったという。このことでも氏が如何に強靱な精神の持ち主かということがおわかりいただけるだろう。

そういった経歴をひっさげて開校された戸塚ヨットスクールは、当初から情緒障害児を受け入れる施設としてスタートしたわけではなかった。あくまでもヨットの技術を教えるための学校として出発したのである。しかし、開校間もない頃、生徒の1人にたまたま登校拒否の子供がいたのである。父親が気分転換になればという気楽な気持ちで同スクールの合宿に参加させたのだった。ところ

が、それまでいくら叱っても学校に行かなかった子供が、合宿を終えて帰ると翌日から学校に行くようになったというのだ。

この事実は口コミながらも、あつという間に我が子の登校拒否に悩む親たちの間に伝わり、入校が相次いだ。そしてスクールでのトレーニングで学校へ行く子へと更正されていったのである。教育に関しては全く素人といってもいい一ヨットマンが成し遂げたこの快挙は、新聞で報じられるところとなり、登校拒否児ばかりでなく、家庭内・校内暴力を起こす子供や非行少年までもが詰めかけるようになった。

それまで穏やかだった美浜町の浜では、如何にもツッパリといった体の少年や虚ろで覇気のない目をした少女たちがコーチたちの罵声や体罰を受けながらの訓練が連日のように繰り返された。そこには現代の学校教育にはないピリピリとした緊張感がみなぎっていた。たしかに、その訓練風景を見る者の中には悲鳴にも似た声で「可哀想」と目に涙し、体罰の存在する訓練を批判するムキもあった。しかし、ヨットスクールの効果は絶大で、終了を認められた子供たちは見事に立ち直り、社会復帰、学校復帰していったのである。

順風満帆にも見えた戸塚ヨットスクールではあったが、79年2月24日、見学祐次君(14歳)が化膿性腹膜炎の疑いで死亡、翌年11月4日吉川幸嗣君(21歳)が肺炎のため死亡した。双方とも地元の半田警察署によって過失致死の疑いで書類送検されたが、名古屋地検は不起訴処分とした。ところが、半田署は82年12月12日の小川真人君(13歳)の死亡に対し、傷害致死の容疑をかけヨットスクールの家宅捜査に踏み切ったのである。

その後、冒頭にも述べたように戸塚氏は半田署に捕らわれの身となったのであるが、逮捕後も戸塚氏の不屈の精神は衰えるところを知らなかった。約3年間の拘留期間中にそれまでの体験を理論体系化する「脳幹論」等を完成させ、保釈後も精力的な教育活動を展開している。もちろん、世間が一丸となって非難した「体罰」の正当性も主張し続けている。

事実、今もなお、スクールは細々とながらも存続している。もちろん、これらは戸塚氏の逮捕後も入校希望者が後を絶たないからである。むしろ、氏は入校を断り続けている。現在在籍する生徒たちはやむなく氏が預かっているのである。それでも入校を希望する電話は全国津々浦々からひっきりなしにかかってくる。しかも、直接スクールを訪ねて来る者もかなりの数に上る。

そうした親たちの置かれている状況は想像を絶するものがある。訪ね来る者全ての顔は恐怖にひきつり、声は上ずっている。行動にも落ち着きがなく、どこかそわそわした感じを受ける。戸塚氏とのやりとりはお互い困果て弱り果ての連続である。それでも、そのほとんどが入校はかなわない。戸塚氏がかかなりの線まで入校を断るのもあるが、現状況ではスクールに迎え入れるのには大きな障害がある。

以前のようにスクールのコーチがその子供をむりやり連れて来るわけにいかなくなったのである。つまり、子供自ら、あるいは保護者がスクールまで連れて来なければならなくなったのだ。暴れたり、わめいたりの子供たちをである、これはもう、入校不可能といっていいだろう。当然、そうした子供を抱える家族のほとんどは「死ぬか生きるか」「殺すか、殺されるか」の瀬戸際に立たされているといっても決して過言ではない状況である。

それはスクールの是非の前に敢然と立ちはだかる恐ろしき事実なのである。そして、そうした親は異口同音にすがるものは氏をおいてないという。もちろん、スクールが今世間でどう受けとられ、どういったことが問いただされているかを知った上でのことである。

これは客観的に見ても、もう1度戸塚氏の主張に耳を傾けなくてはいけない時が来たといっているのではないだろうか。

本書はコーチ及びスクール合宿終了生たちの証言に基づき、戸塚ヨットスクールの真の姿に迫った上で、戸塚氏の理論を集大成したものである。これは、体罰という行為の根本を問い直し、ひ

いては綺麗ごとしか言えなくなった社会に対してのアンチテーゼであり、人間の本能に目を向けることにより文明病に陥らないための警告の書ともいえるだろう。

証言 I

昭和 57 年、訓練中に亡くなった小川真人君は「弱々しい自分を変えたい」と、その死の 8 日前に自ら戸塚ヨットスクールの門を叩いた。もちろん、そこでスパルタ教育が行われていることを知った上での入校である。すなわち、小川君は戸塚氏の教育方法に共鳴していたことになる。にも関わらず、その死によってマスコミを始め、教育関係者たちは一斉にその教育に非難の声を投げかけた。

しかし、その死と訓練の因果関係はともかくとして、その教育方法は間違いであったのだろうか。ここでは、スクール関係者に典型的なスクール生たちの横顔と入校までの経緯、さらには如何に教育されたのかをレポートしてみた。

※本文中、本来『治す』と表記すべき箇所を戸塚氏の「トレーニングにより元の真っ直ぐな状態に戻す」という理念に基づき『直す』と表記しております。

山口孝道コーチの例証

ケース I 無気力

浮浪者も顔負け 1 年風呂にも入らない無気力青年

一言では言い尽くせないほどの子供たちを見ってきましたが、とりわけ印象的だったのは東京の 20 歳前後の青年です。ヨットスクールに「何とか引き取って直してもらえないか」との依頼に来たのは、結婚を目前に控えたその青年の姉さんでした。青年の状態を充

分に聞いた上で引き取ることとなり早速、同僚コーチと東京の家へと出かけて行ったのです。

到着してしばらく別室で待たされたのですが、母親たちの説得にも関わらず、自ら我々の前へ出て来ようとはしない様子でした。さすがに家族も強制的に連れて行ってもらうしかない諦め、その旨を我々に促しました。

我々が最初にその青年を目にしたのは台所の隅でした。新聞を広げその姿を隠していたのですが、それを取り払って、思わず後退りするほどの驚きでした。それはもう浮浪者そのものの姿と聞いていいでしょう。伸ばし放題の髪にはふけや埃、汗などがこびり付いて、何本もの髪が団子のように固まって、ちょっと近づくにも躊躇するほどの身なりでした。もちろん、悪臭も辺り一面、まさに鼻の曲がる思いを余儀なくされました。

それでも、怯むわけにもいきませんから、強引に動かさずその手を取るとどうでしょう。ボロボロとまるで皮膚が剥げてしまったかのような異様な感触で垢が剥げ落ちるではないですか。何ミリもの垢が皮膚を被っているのです。家族の話では 1 年以上も風呂に入っていないとのことでした。このような無気力症ケースでは往々にして入浴を拒否するものですが、これほどひどいのも珍しいといっていいいでしょう。

巷では、情緒障害児を「可愛い 10 代の子供」として、その子たちに対するヨットスクールの接し方を批判する向きもありますが、あまり現実を把握していらっしゃらない方々としか言いようがありません。なにしろ、1 番その子を愛しているはずの家族が、手の尽くしようをなくしてヨットスクールに依頼して来るのですから、いかに悲惨なものかをご理解していただきたいところです。

トレーニングでみるみる表情が変わる子供たち

彼の父親は会社経営者で裕福な部類の恵まれた家庭環境と聞いていいでしょう。小学生、中学生までは、優秀な子供だったようです。ところが、女の子に振られたことをきっかけに無気力症に

陥ってしまったとのことでした。まず、無気力な生活態度を見せるようになり、やがて登校拒否を繰り返し、後は坂を転げ落ちるようになり悪化していったケースです。

なるほど、彼の場合、失恋がその引き金になりましたが、それはあくまでもきっかけに過ぎません。家族の話を総合するとそもそもの原因は別のところにあることがはっきりと見受けられました。まずは彼が家族の中で置かれた立場にあります。「男一人の長男」というところから、期待も高かったでしょうし、かなり甘やかされて育てられた節があります。事実、我々が引き取りに行ったときも、依頼者の姉が積極的なのに対し、父親は消極的なリアクションしか見せませんでした。もちろん、それまで溺愛してきた息子と離れ離れになるのですから寂しかったに違いありません。しかし、後々この父親が彼の更正の障害となったのです。

ヨットスクール入校直後は予想通り、スクールのカリキュラムはこなせません。何年も家の中でゴロゴロと過ごしてきたのですから、体力的にやれるわけありません。もちろん、「何々をしろ」と命令しても、声が届いていないのかと声を出した本人が疑ってしまうほどの反応でした。

いずれにしても、まずは体を動かすクセをつけさせなければなりません。コーチ陣も大変な努力を強いられるわけです。しかし、徐々に体が動くようになってくると表情に変化の兆しが表れました。初め、焦点の定まらない虚ろな目をしていたのが、目に輝きというか力強さが出てきたのです。これは情緒障害児の典型的なパターンで、入校時、目の吊り上がった子や無表情だった子が訓練をこなすことでその表情が柔和になってくるのです。とりわけ、その青年は、入校時の健康診断にあたった医者を「僅か1か月でこんなにも変わるものか」と驚かすほどでした。まさしく、別人といったいいほどの変わり様でした。ところが、表情は良くなったもののまだ完全に直っていない時期に姉の結婚式ということで一時帰宅することとなったのです。それが間違いでした。父親は表面上の変わり様に喜び、甘やかさも手伝って「もう、充分良くなったのですから、しごきのあるようなところには帰しません」と言い始め、2人で何処かに雲隠れしてしまったのです。

もちろん、まだ完治していない旨を伝えたのですが、聞く耳を持ちません。可愛くてしょうがない子供と一緒にいたい一心での行動だったのでしょう。戸塚校長がかねてから嘆く「遠い将来の大きな快感よりも、目の前の小さな快感」を求めてしまったのです。要の姉が嫁いでしまったことも手伝って、父親の過大な愛情の注ぎぶりは歯止めを失い、むしろ拍車がかかり、せつかく直りかかったわが子をだめにしてしまったのです。言うなれば、このケースでは本人の責任というより、親の責任が重大でしょう。もちろん、ヨットスクールに来る子供たちには多かれ少なかれ、必ず親の責任があると私は思います。

ケースⅡ 非行

包丁を手に暴れだす少年も借りてきた猫にひょう変

非行のケースはいろいろあり過ぎるぐらいですが、共通しているのは彼らは皆、まず虚勢を張っているということです。

岐阜県のハイティーンの非行少年の場合は、父親から「とにかく手をつけられない状態だから連れに来てくれ」という連絡があり、その状況からコーチ4、5人連れだって自宅まで赴きました。ところが、自宅でいくら待っても、当事者は帰って来ない。こういったケースはよくあることで、どこかに遊びに行ってしまうと、帰宅はすっかり陽も昇ってしまったからでした。

もちろん、我々の存在を認めると、大暴れしはじめました。無気力や登校拒否など、内にこもる子はどちらかというと体力がない子が多くまだいいのですが、非行の場合は身長が180センチ以上もあるような大男が多い上に、体力的にも外での喧嘩などに明け暮れていたりするものですから、暴れだすたいへん手こずらせます。彼は隣の家の台所に駆け込んで、包丁を2本取り出してきました。

それで切りかかってくるので、危険きわまりないといったところでの騒動となったのです。最後には2階の自室に立てこもり、「死んでやる」と叫びだしました。籠城を決めこまれると、こちらは、手も足

も出ない。そのうち、部屋から「痛い、痛い」という悲鳴を上げ、ころげ回っている気配がしました。あわてて部屋に入り取り押さえるといった体でした。幸い良く切れそうな出刃包丁ではなくて、サビついた菜切り包丁で切ろうとしたものですから、怪我はごく軽いものでした。

ところが、それだけ騒いだ子でさえ、車に乗せると急に大人しくなってしまう。自分の親の前では、騒いだり大げさな言動をするわりに、親がいなくなると借りてきた猫のようになってしまうのです。このパターンはだいたい共通しています。ヨットスクールにきた当初は、いろいろ強がるわけです。どこそこの暴走族のボスだったとか、学校を何校も束ねている総番長だとか、たしかにホントにそういう子供もいましたが、こちらがガツンとやるとシュンとしてしまうのです。

大人たちが毅然としないから非行は助長される

彼らにしてみれば、我々は、今までの大人とは違うぞ」というのが絶対あると思います。つまり、学校の先生でも、父親でも彼らの格好や体格、言動に圧倒されて何も言わない。どこかで彼らを怖がっているのです。だから、彼らもつけ上がって「大人はこんなものだ」と高をくってしまうわけです。でも、我々の場合は、決して怯まない。だから彼らにすれば、「今までと勝手が違うぞ」と、まず、びっくりします。それで実際に迫力と勢いで抑えつけられるから、急に大人しくなるしかないのです。自分たちより強い相手には情けないほど彼らは従順な姿勢を示します。つまり、父親や先生がもっと毅然とした態度で臨めば、非行という問題はそれほど悪化しないはずなのです。ところが、それができてないからあれだけエスカレートして周囲の意見に耳を貸さない、迷惑を考えないといったやりた放題になってしまうのです。

ただし、非行の子供たちは登校拒否や無表情の子供たちと違って大旨、基本的に順応性に優れているようで、ヨットを覚えるのは早いです。彼の場合もそうでした。ヨットスクールに入った当初は、「俺が1番強いんだ」と虚勢を張っていましたが、コーチ陣の

気迫に気後れしてか態度が極端に変わって、どちらかといえばお調子者といった風に従順な青年となりました。

はっきり申し上げれば、頭のあまり良くない非行少年、または不良に属すると思われる子は、直りづらい一面があります。良くなったと思っても、とどのつまり元に戻ってしまうケースが多いようです。

それに引き換え、頭のいい非行少年というのは、直ると目覚ましい力を発揮したりします。非行というのは元々、登校拒否の子よりも行動力がある子たちですから、これが正常になると、リーダーシップをとるようになってたり、見違えるような立派な青年に生まれ変わったりする確率が高いようです。

甘えが許されないヨットスクールでの生活

全て自分の力だけが頼りの合宿生活

ヨットスクールは団体生活ですから、生徒同士の競争原理が生活にまで浸透することになります。ここでは常に優先権は、強い者にもたらされます。つまり、食事も洗濯も強い者が、先に、しかも多く食べられますし、先に使い早く済ませることができることになります。大きさにいえば、弱い者は食事にありつけないから生きていけないという社会構造が成り立つわけです。当然、今まではこんなことあり得なかったのです。いくら学校に行かなくても、非行行為ばかりしていても、親はきちんと御飯を用意してくれていたのですから、早い話がなにをやっても食べていけたわけです。

ところが、ここではそんな甘い了見は通用しません。強い者に優先権があり、ヨットの上手な人間がエライ。この基準にあてはまらない者は、どんなに騒ごうが泣こうが構ってくれる人間はいません。要するに、愛の手を差し伸べる人間が1人もいない、自分の力だけが頼りなのです。

彼らも入校して、しばらくするとそのことに気づきます。そのとたん、自分なりの方法で食事や洗濯の優先権を得ようと必死になりま

す。頭を使い、気を使い、もちろん、身体を使いながら、食事などにありつく方法を自分なりに作っていくようになるわけです。

実は、この子供たちはそれまでこういった人間が生きる上で必要な基本的な知恵や努力を家庭ではする必要がなかったといっているでしょう。もちろん、このことはヨットスクールに来た子供たちだけの話ではありません。今のほとんどの子供たちは、程度の違いはあるにしろ、どれも同じような状態。社会に出て自分で働くようになるまで経験することがまずないというのが一般的。そういった意味でヨットスクールは、社会の中を1人で生きるための箱庭みたいなところがあります。だから、これに耐え抜いた人間は、当然、生命力というか強さが生まれてきます。

体罰を避けたい気持ちが立ち直りにつながる

ヨットスクールで、トレーニングを怠けている者は我々コーチの体罰を受けることになります。それを避けるためにも一生懸命、トレーニングをやらざるを得ません。よく「体罰はいけない」「ヨットスクールは屈強な男たちが子供たちをいじめている」といって批判する人がいますが、これは的外れもいいところです。

体罰はいけないと言いますが、体罰は暴力では決してありません。それは、次の行動に移させる、たとえば、ヨットに乗れるだけの体力に必要な筋力トレーニングをさせるための手段なのです。もちろん、口で言うということ聞くような子供たちなら、ヨットスクールに来るまでには至りません。聞かなくてどうしようもない異常行動をするようになったから、ここにやって来るんです。そんな子供に理屈が通用するはずがありません。そこで、体罰という手段でトレーニングをするようにしむけるわけです。

その繰り返しの中で、子供たちは当然体罰を避けたいですから、自らトレーニングしはじめるようになり、それがやがて立ち直りにつながっていくわけです。そうした状況を確実につかんでもいない人が、体罰を行うことの効果を考えないでやみくもに批判する。猛省を促したいところです。

もう一つ、苦言を呈したいのが、「屈強な男たち」と我々コーチ陣を新聞などでは紹介していましたが、そんな大男はいませんし、事実、体つきなら非行少年の方がはるかに大きい。これはマスコミが作り上げた我々の虚像というしかないでしょう。仮に、そう見えるのであれば、大きな体をした非行少年たちが、虚勢を張るだけの情けない子供たちということが言えるでしょう。

東秀一コーチの例証

ケースⅢ 登校拒否

成績の優秀な子供ほど登校拒否にかかりやすい

登校拒否というのは本来は優秀な子供ほど陥りやすいという特徴があります。成績が1番にいた子が2番になって悩む。それで、学校にいけなくなるようなケースが非常に多く見受けられます。逆にいうと、成績が30番の子が31番になってもそう悩みはしませんが、成績のいい子ほど、そうしたちょっとしたことでも悩むようになるのでしょう。周囲からすると、それほどのことでもないことと思うのですが、当事者の彼らにとってみれば重大なことになってしまうのです。

名古屋の北区の中学2年生の男子が、まさにこのケースでした。彼は登校拒否と家庭内暴力を起こして、その父親から頻繁に「とにかく、今すぐ引き取って欲しい」という電話がかかってきました。しかし、当時のヨットスクールは飽和状態でとても引き取れる状態にありませんでした。ところが「しばらく待ってほしい」との返答をしていたにも関わらず、父親は昼夜を問わず、のべつまくなしに電話をかけてくるほどでした。

登校拒否というのは、ほとんどが昼と夜の生活が逆転します。彼もその例外にもれることなく、夜起きて、親に暴力をふるっていたのです。あまりにもひっきりなしに電話をかけてくるので、正直言って「こちらの状況、立場を全然考えていない親だな」と苦々し

く思ったのですが、相当参っている様子に根負けして、特別の計らいで迎えに行きました。

この家庭内暴力は、弱い人間に暴力をふるう特徴があって、まず、母親がその対象となります。この子の場合それを乗り越えて父親にも暴力をふるうようになっていました。自分が夜起きたとき、両親は寝てる。「俺が起きているのになんで寝ているんだ」といった言いがかりをつけては暴れだすわけです。要するに夜中に1人で起きているのが寂しいというところからこういった行動に出るのでしようが、どうひいきみに見ても普通の感覚からいえば完全な甘え以外のなにものでもありません。

私はその頃コーチになったばかりで、経験が浅かったこともあるのかもしれませんが、入校当初はごく普通の子に見えました。自分で直ろうという意志もあるみたいでした。ただ、暴れだすと自分でも何がなんだかわからなくなると言っていました。

現役で医学部へ進学するほどの立ち直りを見せる子も

入校後は、1度だけ逃げ出したことはありましたが、かなり頑張っていてやっていました。校長の「だいぶ良くなったから親を面会させよう」という提案で、ヨットスクールの近くで両親と一緒に食事をといることになったのです。

ところが、少年の顔を見たたん、「自分の子供じゃない」と言い始めたのです。私はあっけにとられて、自分の子供を突き放す意味でそう言っているのかと思ったぐらいです。しかし、どうもそうじゃない。本気で疑っているのです。大げさな話ととらえられがちですが、これもまぎれもない事実なのです。そのくらい登校拒否や家庭内暴力をしていた頃と、その子の顔つきが変わっていたわけです。

「お母さん、僕だよ」と言った我が子の声を聞いたところで母親も本当に自分の子供だと納得したようでした。しかも、その子は登校拒否をするようになってからというもの、親にそんな優しい口調

で「お母さん」なんて言葉をかけることはなかったはずで、親としても相当うれしかった様子でした。

その後も、まじめにトレーニングをしてここを卒業したのですが、学校は長期間休んでいたこともあって、成績はかなり下がっていたようです。それでも、懸命にやって1年後には学年でトップの成績になった。元々成績は良い方といえばそれまでですが、登校拒否になる前もそこまでの成績には至っていなかったのが、それ以上の結果を残したんですね。大学も名古屋大学の医学部に現役で入学、登校拒否をしていたのがウソのように立ち直りました。

登校拒否の場合は何かのきっかけがあってズルズルと学校に行かなくなってしまうわけです。しかし、そういった弱い子供でもここで困難を自分の力で撥ね除ける力さえ養ってあげれば、素晴らしい結果を期待できるようになるのです。彼もまた将来を嘱望される青年となりました。

ただ、残念なことに彼にはヨットスクールの裁判の時に、証人になってもらえませんでした。もっともかたくなに拒否したのは両親の方で、子供の過去が表沙汰になって明るい前途に傷でもついたらそれこそ大変ということだったのでしょう。本人は「ヨットスクールで直ったのだから協力する」と言ってくれたのですが、両親の子を思う気持ちに押し切られたようです。是非とも自分たちが途方にくれ、ヨットスクールにひっきりなしに電話をかけてきたときのことを思い出していただきたい。

そもそも、自分のところが良くなったら、邪魔者扱いする。そうした親だからこそ、問題児が育ってしまったといえるのかも知れません。

ヨットスクールでは日常茶飯事の脱走

自分の弱さからの逃亡

ヨットスクールに入ってよく起こることに脱走があります。トレーニングが苦しくて逃げ出す。登校拒否、非行、家庭内暴力などい

いろな症状の子供たちがいますが、どんなタイプもこの脱走をよく企てました。

近くの民家に飛び込んで、自分たちがどんなひどい仕打ちをされているかを訴えて同情を引き、そこから家へ連絡する者、ヒッチハイクをして逃げる者など、様々な方法を使って逃げようとしてきました。

その結果、脱走してそのまま帰らない者、運良く捕まえてもう1度ヨットスクールでトレーニングする者。脱走後はこの二通りに分かれます。実はこの時期が大きなポイントになるのです。

苦しいトレーニングをするので、当然、逃げ出したいくなります。しかも、それまでは学校に行かない、非行グループに入って遊んでばかりといった我がまま放題の、自分勝手な生活をしていたので、余計に身に染みるはず。ある非行少年などは、「こんなところに来るぐらいなら、少年院の方がましだ」と嘆いてましたが、正直な感想がも知れません。

なるほど、少年院なら、規則があるとはいえ、自分の虚勢が通用してそれなりに威張ることもできるし、彼らの感覚の中には院を出てから箔がつくというものもあるでしょう。しかし、ヨットスクールでは、その虚勢は入校したとたんに、コーチらによってその化けの皮ははがされますし、いくら口では偉そうに言ってもヨットが上手にならないと尊敬もされません。いうなれば、ヨットスクールは今までの自分の無力さを徹底的に思い知らされる場所ですから、当然、嫌なところはずです。

脱走後の対処が更正への別れ道

そこで脱走を企てる。逃げた場合、1番困るのはまた元の環境に戻って、せっかく直りかけていた子供たちが、入校する前の状態に戻ることです。脱走すれば、遅かれ、早かれ間違いなく家に帰ります。登校拒否や家庭内暴力の場合は、真っ先に家に帰り、非行の場合は仲間のところを転々としながらも、いずれは自宅に戻ります。それだけ、自宅が居心地のいいところという証明でしょう。

そこで、親がヨットスクールに送り返してくれば問題はないのですが、中にはもうヨットスクールに戻らなくてもいいという困った親もいます。あれだけ、我が子に手を焼いて、自分が殺されるか、子供を殺すかという状況に陥った親でさえ、わが子の顔を久しぶりに見ると、厳しいトレーニングを強いられるヨットスクールに戻したくなるのでしょうか。もちろん、子供たちはヨットスクールから逃げたい一心で親にはどんなにひどい仕打ちをされているかということをおバーに訴えるわけです。

たしかに、親心としてわかる気もしますが、一時の感情に流されると、今までやってきたことがすべて無駄になってしまいます。私たちも「子供の将来を考えれば、辛いかも知れないけど今が我慢するときです」と説得するのですが、その時点では、すでに子供に甘い親の顔が出て、首を縦に振らないといったケースが多々ありました。保護者がスクールに戻ることに消極的である以上、我々はどうすることもできないので、後ろ髪を引かれながらも引き上げますが、甘い親心で子供の将来をダメにした、このようなケースは今でも悔やまれます。

逆に脱走した子供たちを途中で捕まえたり、家に帰ってもまた連れ戻してきたりして、再びトレーニングする場合はいい結果が生まれます。たしかに、1度ならず2度脱走するケースもあります。脱走を失敗することによって、または家に帰っても戻されることにより、子供たちは腹をくくってしまうのです。

「ここでやるしかない」と観念することで、その時点から大きく変化していった例が数多くあります。つまり、脱走は彼らの最後のあがきであり、これを乗り越えることによって、立ち直る方向に向かうわけです。

ヨットの楽しさ、そして目的を見出すことができれば間違いなし

ヨットスクールには、全国から問題児がやってきました。ある非行の子供は、春日井市の中学の総番長をやっている状態で、学校に行く教室に入らずに校長室で遊んで、昼食には寿司屋から出

前をとる、学校の廊下をバイクで走るなど無茶苦茶をしていました。いわば、もうやりたい放題の生活をしていただけです。

格好は髪を赤く染めて剃り込みを入れている。そんな子供でも、ここに来れば、コーチにガツンとやられる初日で大人しくなります。私は体もそんなに大きい方ではありませんから、どうして虚勢を張っているだけの子供たちを、学校の先生や他の大人たちは怖がっているのか不思議な思いです。

さらに、特徴的なのが登校拒否の子供たちの多くに、いわゆる肥満児が多いということです。夜と昼の生活が逆転して、ほとんど家からも出ない状態ですから、どんどん太ってしまうでしょう。115 キロとか 118 キロといったように 100 キロを超えている子供たちが何人もいました。

また、女子の場合には、目が吊り上がってしまっている子が目立ちました。多分、不安の表れたと思いますが、一様にそんな目をしているのです。もっとも、それもヨットスクールで何か月かのトレーニングを積むことによって、自然に直ってきます。

ともかくにも、このヨットスクールには、一般の人が考える、まだ幼さの残るいたいけない 10 代の子供というのはいません。悪く言えば、まともじゃない。行き着くところまで行ってしまった子供たちがここに来るわけです。もちろん、言って聞かせて、「ハイ、そうですか」という素直な子供たちではありません。そこで、体罰を加えてトレーニングさせることとなります。

しかし、もっとも効果が上がるのは、本当にヨット、あるいはウィンドサーフィンが楽しくなることです。ヨットの操縦は早い子で 2、3 週間あればできるようになり、普通の子でも 1 か月あれば操れるようになります。しかも、ヨットの場合はレースができますから、これでお互いに競う。1 番を勝ちとることは、誰にでもうれしいことです。そうした経験の中で勝つことのうれしさを知り、今度はこういったところをこう工夫しようといった努力や向上心が生まれ、さらに頑張るようになっていくわけです。つまり、どんな困難の中にあっても楽しさを知れば、子供たちはどんどん立ち直ってきます。

ウィンドサーフィンはかなり上達しないとレースはできませんが、個人的に楽しめる要素がありますので、この場合もスポーツそのものの魅力を知ることが重要なポイントとなります。

つまり、いくら理屈でいってもダメです。ヨットやウィンドサーフィンを楽しむことを知れば立ち直るのは早いですから、以前はコーチと生徒がお互いに競い合っただけのレースを頻りにやったりもしました。自ら進んでヨットを楽しむようになれば、心配ないのです。この時の生徒は完全に立ち直った状態です。

言い換えれば、自発的に何かを楽しむことができないから、いろいろな症状が表れるわけで、ヨットやウィンドサーフィンは、その楽しさを知るいい体験にもなります。そして、その楽しさを感じた子供たちは、もう問題行動を起こすこともなく、見事に生まれ変わります。つまり、ヨットやウィンドサーフィンは、トレーニングの手段でありながら、喜びを得る道具でもあるのです。

証言 II

戸塚ヨットスクールを語る場合、第三者の目だけではどうしても見えにくいものがある。やはり、登校拒否や非行などで実際に入校した当事者の目から見たスクールこそより真実に近いはずである。もちろん、元スクール生の中には戸塚氏を批判する者も数多く存在する。しかし、そのほとんどは終了を認められなかった者たちであることも事実で、自然、その証言には悪意に満ちた感情が介在する危険性も高い。そこで、ごく冷静に当時のスクール像を語るであろう立場にあるスクール終了生 2 人と脳幹トレーニングによって病を克服した方に、そこでの経験や影響について語っていただいた。

卒業生が語る戸塚ヨットスクールと私

岡村加奈子さん(大阪府・24歳)

先生や学校の方針に反発して登校拒否

大阪教育大学付属の天王寺中学に入学したのですが、まともに通ったのは1年の1学期の間だけでした。夏休みも終わり2学期が始まると、これといって深刻な問題がなかったにも関わらず、なんとなく学校に行くのが難儀に感じるようになって登校拒否をするようになったのです。

もともと、国立大学の付属中学ということもあって、高校へはエスカレーター式に無試験で進学できますから、教育方針に「勉強は適当でいいから、課外授業や学校行事に一生懸命取り組みなさい」などといったのんびりムードが漂い、自然、怠惰な気分が頭をもたげる環境ともいえるところがあったのかも知れません。しかも、クラスメートはどちらかというと大人しい子が多く、勝ち気な私とは正直言って性が合わなかったのでしょう。心から打ち解けて語り合える友達もこれといっていませんでした。

さらに、3学期になると登校拒否をする私を面白がって、クラスメートは学級委員長に選んだのです。あえて目くじらを立てるほどの悪意は感じませんでしたが、いじめの一種がそこに存在したことは確かでしょう。いずれにしても、時が経つにつれ、学校へ行こうとする気力は失せる一方で、3学期終了時点で退学することとなったのです。

ところが、当時、中学と並行して通った入江塾という塾へは楽しくて積極的に足を運んでいました。なにしろ、この塾は受験のための勉強ではないということが魅力で、自分の好きな科目、たとえば、私の場合ですと数学や英語といった具合に本人の意志を十分に尊重した教育がなされていたのです。まさに中学とは雲泥の差です。

しかし、そこにもやがて足が向かなくなってしまうのです。2年次から転入した公立中学も小学生時代の友人がいるということ

もあって、私はもちろん、親も真面目に通うだろうとの期待もあったのですが、とことんさぼり癖がついてしまっていて4月に3週間ほど通ったところでリタイアしてしまいました。

とにかく、自分の意志で行きたいと思っても、午後起き、明け方に床に着くという生活習慣がついてしまっていて、それが打破できないのです。級友も心配して「明日、音楽の笛の試験があるから練習しよう」と訪ねてきてくれて、一緒に練習し、その時は明日は行くぞ！という気になるのですが、翌日には行く気力が失せてしまっているのです。

夜と昼の生活が逆転し、家の中だけで半年間暮らす

この時の気持ちを一言でいうなら「面倒くさい」です。これだけで説明できるような状態でした。昼過ぎに起きて、家でゴロゴロ過ごして夜になるとラジオの深夜放送やテレビの深夜番組を見て過ごすような毎日です。もちろん、外出もしない。親も私がそんな状態になってから、あまり外に出したがない。他人にそういう娘の状態を見られたくなかったのだと思います。

母親はいろいろなところに相談を持ちかけたみたいですが、当事者の私は「関係ないや」といった体です。あるカウンセラーには「今はあまりとやかく言わないで放っておいた方がいい」と言われたこともあるようです。次第に両親も「腫物に触る」ような感じで扱いはじめ、今度はその態度が勘に触り余計にイライラしてしまい、ついつい親に対して乱暴な言葉を吐くようになってしまうといった悪循環を繰り返していました。

ただし、暴力はほとんど振るわなかったのですが、ある時、母親の肩を少し押しただけで転んでしまったことがありました。私としては、ほんのちよつと力を入れた感覚だったので、まさか転ぶとは思わなかった。それが転んだのでびっくりして、それ以後いっさい親に対して手を出さないようにしていました。

テレビを見てボーと過ごす、そんな状態が10月までの約半年間続きました。もちろん、その間いつも心の中では何かをしたいと思いつつも何もできない毎日だったわけです。

その10月も終わろうとしているある日のことでした。朝寝ていると突然、「起きろ!」と大きな声が聞こえて無理矢理起こされたのです。はじめは親だと思ってそのまま寝ていたのですが、叩き起こされるとそこに知らない男の人が立っていたんです。それが戸塚ヨットスクールのコーチでした。

それまで私はヨットスクールの存在を知らなかったのですが、たまたまヨットスクールの横田コーチがご近所の方ということで、母親がいろいろと相談にのっていただいていたようです。そんな経緯もあって、私の状態がカウンセラーにかかっても全然よくなるまいというところで、連れていってもらったことになったわけです。

当然、その時点では、私にとっては寝耳に水、何がなんだか分からないまま、連れていこうとするコーチに抵抗していました。コーチは容赦なく、その場で2、3発殴りつけると強引に私を車に押し込みました。その後はあまりよく覚えていないのですが、抵抗しても無理だということのはっきりわかり、大人しくついていったと思います。車に乗ると、私とコーチ2人の他に、神戸からヨットスクールに自発的に入る女子高校生と脱走して捕まった四国の男の子が乗っていました。ヨットスクールのことは何も知らなかったで、どこに連れていかれているのかも知らないまま車に揺られていたのです。

2週間でヨットの虜に

ヨットスクールに着いた時は雨が降っていて、ヨットに乗る姿は見かけませんでしたが、室内でヨット操作の講義が行われていました。第一印象は「男子が多いな」というぐらいでした。生徒は20人ぐらいだったでしょうか。その日は講義を受けるだけで終わり、翌日、健康診断を受けました。

実はその検査で不整脈が出て、運動をするのは無理と校長などが判断して家に連絡したのです。ところが両親は「死んでもかまわないからお願いします」と返答したと言います。

もちろん、このことは卒業してから聞かされました。

そうした事情から、私の場合は筋力トレーニングを無理強いされるということはありませんでした。しかし、半年ほどまったく体を動かさなかったとはいうものの、陸上競技経験を持つという自信から、他の人と変わらないメニューをこなしていました。もちろん、当初はきついものがありましたが、苦しかったという覚えはありません。また、ヨットスクールに入ってから殴られたという経験はありませんでした。体操も一生懸命やりましたし、ヨットも初めは恐怖を覚えました。2週間もすればすごく楽しいものになりました。ヨットに乗ってさえいれば、文句は言われぬという意識もあって、かなり積極的にやった方でしょう。

それでも、2回脱走を企てました。そんなつもりは全然なかったのですが、2回とも神戸から来た女の子に「訓練がきついので一緒に逃げよう」と誘われての行動です。

どちらかははっきり記憶にありませんが、ヒッチハイクをして脱走しました。運転手にヨットスクールでどんなひどい目に遭わされているかということ自分を弁護しながら大げさに言うと、その人は親切な人で同情して家に連れていってくれたのです。さらに自宅に帰れるように母親を説得してあげようと電話をかけてくれたのです。ところが、母親の方は、こちらのウソを見抜いてヨットスクールに連絡して、結局連れ戻されることとなりました。この2度の脱走は初めが入校して1週間ぐらいのときで、2度目もそれから1週間ぐらい経った頃だと思います。それからはいっさい脱走をしなくなりました。

その後はヨットに熱中して楽しいぐらいでした。自分で上達するのがわかり、すごく気分がいいんです。だから、自分では気づかなかったのですが、1か月後に両親と担任の先生が面会に来てくれた時に「顔つきが変わって、すごくいい表情をするようになった」と言われたぐらいでしたから、かなり顔つきも変化していたようです。

厳しい中にも楽しさがあった

結局、ヨットスクールに在籍したのは2か月。2学期の最後の2週間から学校に行くようになりました。たしかに最初は面倒くさいといった気持ちが少しあったのですが、それよりも、「ここで行かないと自分はおしまいだ」という気持ちが強かったのでしょう。同級生から物珍しそうに見られたり、会話にも、溝のようなものを覚えましたが、徐々にそれもなくなり、自然に学校に行けるようになりました。

私の場合、ヨットスクールに行って何故、直ったのかと自己分析すると、楽しいことが見つかったことと生活のリズムがつかめたという2点があると思います。

楽しいことというのはヨットに乗ることですが、それまでの半年間は何かをしたいと思いつつも何もできない状態だったのです。ところが、ヨットスクールはヨットをやらざるを得ない厳しい状況があります。それで仕方なしにやっているうちにだんだん面白くなってきわけです。

もう1つの生活のリズムを作る点は集団生活ですから、朝必ず起きなければいけない。家にいたときのような自分勝手は通用しません。起きないとコーチに叩き起こされる。つまり、上から無理矢理押しつけられることで、生活のリズムを取り戻せたのです。生活の中に楽しさと厳しさがはっきりとした形であったことが、立ち直った大きな原因のような気がしています。

もちろん、ヨットスクールを卒業してから、自分が変わったと思えるところがあります。私の場合、登校拒否になる前はとにかく勝ち気で自分が1番でないと気がすまないところがあって、勉強のできない子、弱い子の味方を全然しませんでした。心の中には、そういう子に対して「何でこんなこともできないの」という気持ちが常にあったからです。どこか見下していたんでしょう。

ところがヨットスクールを出ると、「トップを走っていてもしかたないじゃない」「もっと楽しくやろう」といった気持ちが強くなり、色々な人とも付き合うようになりました。それまではあまり付き合いなかった成績の悪い子にも心を開けるようになりました。だんだんと人のいいところが見えるようになり変わりました。

それから高校に進学して、北海道大学の農学部に入りましたが、今は自宅で中学生に勉強を教えています。中学の時に通っていた入江塾がすごくいい教え方をされていて「私もいつかは子供に勉強を教えたい」と考えていたので、その方法を参考にしながら実践しています。

今でこそ、充実した毎日を送っていますが、ふと、もしヨットスクールに行っていなかったら、登校拒否はもっと悪化して家族にとんでもない迷惑をかけていたかもしれないと考えることがあります。そういう意味でも、戸塚ヨットスクールは貴重な場所であり、私の甘えを吹き飛ばしてくれた感謝する環境だったと思います。

矢野光昇さん(愛知県・25歳)

シンナー遊び、無免許運転とやりたい放題の中学時代

中学2年の頃から友達に誘われたりして、非行のお決まりのコース、喫煙、シンナー遊び、オートバイを無免許で運転するなど、やりたい放題の状態でした。もちろん学校に行っても授業はまじめに受けないどころか、学校を抜け出して、街に遊びに出掛けることも日常茶飯事。先生に反抗して、いわゆる校内暴力を起こすなど、今思えば、どうしようもない中学生でした。警察に捕まったこともありますが、これといった処分を受けるところまでは至らなかったのが不思議なくらいです。

そんな僕でも母はいろいろ心配してくれていたようですが、当時はそんなことを気にも留めるべくもなく、親不孝の限りを尽くしていました。実は父親を小学4年生のときに亡くしてしまっていて、母は女手一つで育ててくれたのです。にも関わらず、感謝するどころか反抗してばかりでした。暴力こそ振るいませんでしたが、口答えは相当ひどいものでした。今考えれば可哀想なことをしたと反省しています。

手の打ちようを失した母は、戸塚ヨットスクールのことを人伝に聞いてきて、入校するようにと幾度も説得を試みました。しかし、僕は聞く耳を持たない。とうとう、しびれを切らせた母は、ヨットスクールのコーチを呼んだわけです。それが中学3年の2学期を終えた大晦日のことでした。

当日、一晩中、仲間たちと遊ぶ計画で昼間を睡眠時間にあてていました。突然、バタバタという音とともに、3、4人の男が雪崩込んでくると、有無も言わず、叩き起こし、殴りつけてくるのです。はじめは抵抗もしましたが、まったく相手にされませんでした。それまでもケンカなどで殴られることはありましたが、ここまで一方的にやられたことは皆無でした。

連れて行かれるときに母親は「これが最後のチャンスだと思って立ち直れ」みたいなことを投げかけていたようですが、殴られたショックで何がなんだかよくわからないまま車に乗せられたという状況でした。もちろん、その時点でヨットスクールが美浜にあるということすら知りませんでしたから、「どこに連れていかれるのだろう」と恐怖と不安が入り混じった気持ちを抱きながらも大人しく乗っているより方法がありませんでした。

厳しい訓練も無理難題ではなく、できる範囲のもの

ヨットスクールに到着すると、大晦日ですからみんなでワイワイ楽しそうにやっていた。その様子から、そんなに恐ろしいところではないかと一心地ついたのですが、いきなり、ボコボコとやられました。戸塚先生も「またハデな奴が来たな」と言ってたように思います。というのも、その頃、頭を赤く染めてリーゼントにしていたのです。もちろん、即、その髪はぱっさりと切られて坊主頭にされました。

まさに、その日はショックの連続でした。それまでは殴られれば、殴り返すといった仕返しをしてきたのですが、ここではそんなことはできそうもない。怖いという感情しか湧きませんでした。とにかく早く逃げ出したいということばかり考えていたように思います。次の日は正月ですからヨットの練習はなく、2日から本格的な訓練が始まりました。とにかくきついものでした。もちろん、ヨットに乗るのは初めてですから、ヨットに乗ってもすぐ転覆してしまい、思うように操

作できない。とくに水が怖いとは思っていませんでしたが、転覆して海に投げ出されると、ヨットにしがみつくとしかできませんでした。

当時のヨットスクールの1日というのは、朝6時に起床して朝食を取り、すぐ後には7時から1時間みっちり準備体操をするのですが、これは準備体操というよりも筋力トレーニングといった方が適切でしょう。それが終わると8時から海に出て12時までヨットの訓練、1時間休んで夕方4時ぐらいまで休む暇もなく練習をこなします。それ以降は基本的には自由時間なのですが、夕食やヨット操作の講義があったり、洗濯もしなければならず、自分の時間はほとんどないに等しいものでした。たとえあっても、最初の頃は訓練で疲れていますから早々と床についていました。

そんな状態でしたから、入校してからの半月間のことはほとんど憶えていません。唯一、きつくて必死だったということだけが記憶にあるだけです。とにかく、ヨットの訓練もそうですが、それ以上に朝1時間かけてみっちり行われる筋力トレーニングはきついものでした。腕立て伏せ100回、腹筋50回、スクワット、といろいろな運動をするのですが、ノルマ分ができない。すると、コーチの体罰が待ち受けているわけです。初めは「こんなのできるはずないやないか」という気持ちが強かったのですが、できなければいつまでも体罰を受けることになりますから、だんだん何とかやりとおそうという意志も生まれてきます。

不思議なことに体が慣れてくると「絶対にできん」と思っていた筋力トレーニングも苦ではなくなるのです。簡単にとまではいかないにしても、何とかこなせるようになってくるのです。結果的には、決して「何も無理難題を押しつけているんじゃないな」ということに気がきました。つまり、ヨットスクールでは体さえ慣れてくればできる範囲のことを求めていたのです。

少しでも自由になりたくてヨットの訓練に没頭

ヨットの操作も半月ぐらいすると、だんだんと慣れてきて形だけでも乗れるようになりました。ここまでくると、イヤでしょうがなかったヨッ

トや海も楽しくなってきました。つまり、少しでも上達しようという意欲が湧いてくるようになるのです。

また、スクールには同年齢の者が多く、しかも同じ非行経験を持っている者同士は気も合い、けっこう楽しく過ごすことができました。ヨットの練習が終われば「どんなことをしてここに入ったんだ」みたいな話をお互いにして過ごしていました。

ヨットができるようになったり、筋力トレーニングにも慣れてくると、束縛されていた時間にもそれなりの自由が利くようになります。コーチの信用を得て、誰かが脱走すれば、一緒に探しに行ったりすることもありました。

僕の場合、脱走を考えたことはありませんでした。というよりも、入ったばかりの頃は必死にヨットや筋力トレーニングをやるだけでしたから、考える余裕もなかったといった方が正確かも知れません。もちろん、慣れてきてから何回か脱走に誘われることはあったのですが、その頃はすでにヨットが楽しくなっていましたので、わざわざ信用をなくすようなことはしたくありませんでしたので断りました。

卒業前には5台あった大型クルーザの1台の艇長を任されるまでになり、積極的に取り組んでいました。

ヨットスクールでは、コーチが生徒同士にコンビを組ませて、先輩が後輩に教えるようなシステムでしたので、僕も新しく入った子にいろいろと教えていました。

そんなある日のことです。1人でそのクルーザを操作してかなり沖に出ていたのです。双眼鏡を覗いても浜が見えないぐらいのところで、周りには僕以外のヨットはいないという状況でした。じつは以前から、そのクルーザにお菓子を隠していたのですが、絶好の機会だったので内緒で食べてしまったのです。ところが、浜に帰るとコーチから「お菓子を食べただろ」と殴られたのです。僕からは全然見えなかったのが、コーチたちは双眼鏡で僕がどんな様子で操作をしているのか監視していたのです。このちょっとしたエピソードでも、ヨットスクールの徹底した監視ぶりがわかりいただけだと思います。

耐えることを知り、母親にも従順になった

とにかく語り尽くせないほどいろいろなことがありましたが、3月には卒業することができ、約3か月間にわたるヨットスクールの生活にピリオドを打ちました。4月に晴れて全寮制の高校に入学。最近、母とよく話をするのですが、決まって、あのときヨットスクールに行っていなかったら「高校進学もどうなっていたかわからない」という話題が上がります。たとえ進学していても、そのまま中退してブラブラと遊んでいたかも知れません。

短い期間でしたが、ヨットスクールで「耐える」ということを教えていただいたと感謝しています。殴られ、蹴られながら、訓練をやらされているうちに、できないこととあきらめていたことが自分の力でできるようになる。こんなにうれしいことはありません。

高校に入学してからは、寮のリーダー格の先輩に「お前は骨のある奴だ」と言われ、何かと可愛がってもらいました。自分で言うのはおかしいかも知れませんが、中学生まではそんなことは全然なかったのですが、ヨットスクールを出ると自然と態度や行動が男っぽくなっていったようです。つまり、それまでのチンピラのような態度から覇気のある高校生に変わったわけですね。もちろん、母の話にも耳を傾けるようになり、寮生活の合間を縫って会うのも楽しみの1つとなりました。

現在は保険代理店に勤めていますが、10年前の経験が大いに役立っていると確信しています。もし、自分の子供が僕と同様のケースに陥ったときには、迷うことなく戸塚ヨットスクールに入れると思います。それだけの効果があることは僕自身、肌で体験したことから、必ず直してくれるものと信じています。

スクール・トレーニングで膠原病が直った

谷口裕子さん(福岡県・47歳)

とします。これを10分やって5分休むのを3回繰り返すだけ。それで1日のトレーニングは終わりなのです。

しかし、この45分ほどのトレーニングだけで効果がきめんです。まず、バランスを取っている最中に体の弱い部分が痛みだし、それをこらえてやっているとだんだん痛みも取れてきます。トレーニング終了直後は体が異常なほど疲れ、いつも10分ぐらい居眠りするのですが、その後は非常に爽快な気分になり、それまでの疲れがウソのようになくなります。

子供の頃から闘病生活のような毎日だった

膠原病は関節リュウマチと筋肉リュウマチのようなもので、私の場合は子供の頃から梅雨時や雨が降ると関節や筋肉の痛みに悩まされ続けてきました。中学や高校のときはとくにひどく体育の授業も受けられないほどの体でした。しかも、結婚しても子供を産んではいけないと医者に注意されていたほどでした。

ところが、高校を卒業したころから症状も若干よくなり、結婚して無事2人の子供を設けることができました。しかし、それも束の間のことです。2人目の子供を産んでからは、日差しを受けると肌に湿疹が出る太陽アレルギーになり、リュウマチの症状も悪化の一途を辿っていました。少しでも日差しを浴びると湿疹が出るので、外出するときには必ず日焼け止めクリームを塗り、ひどい時になると、指が曲がらなくなり箸を持つのも億劫になったり、まさに闘病生活に近い毎日を送っていました。

それが、一昨年に知人の紹介で戸塚先生とお会いする機会が得られたのです。その時に、戸塚先生は「ウィンドサーフィンでそういった病気が直る」とおっしゃっていました。病院に通っても、思ったような効果は期待できませんでしたし、好奇心も手伝って、ウィンドサーフィンによる脳幹トレーニングを始めたのです。

一昨年の9月から週に1回、戸塚先生やコーチの方に北九州の方に来ていただいていた指導を受けています。

実際に始まる前までは、好奇心とは裏腹に不安感が先に立ち、過激な運動で骨が折れないだろうか、果たしてうまくいくのだろうかといういろいろと考えていましたが、まったくの取り越し苦労でした。その年の暮れにはトレーニングを始める前とは比べものにならないほどの回復をしていました。関節の痛みもほとんどなくなり、生活をすすんで体が何不自由なく動くようになったのです。

それだけの効果をもたらすにも関わらず、そのトレーニングは不思議なくらいに単純なものなのです。海に浮かべたウィンドサーフィンのボードの上に立ち、それを下から揺さぶります。当然、私は少しでもボードの上に立っていようとバランスを必死で取り、落ちまい

蓄膿症も血痰が出て完治した

実は完全な二日酔いでトレーニングに参加したこともあったのですが、ボードに乗ってちょっとバランスを取る運動をただで直ったということもありました。不思議というしかないのですが、やはり戸塚先生が言う脳幹の作用なのでしょう。さらに、このトレーニングのおかげで花粉症も直りましたし、以前から悩んでいた蓄膿症も完治しました。この蓄膿症の場合はかなり前に左側だけ直したのですが、今年になって右側も痛くなってきたのです。その痛みは日増しにひどくなり、ついには顔の右半分全体が痛みだし患部がどこかわからないほどひどいものでした。病院でも見てもらったのですが、歯を4本ほど抜かなければダメだと言われ、薬で痛みを抑えつつトレーニングに出掛けたのです。もちろん、行くには行ったものの痛みがひどく、とても海には入る気がしません。それでも、そのままでは痛みを我慢してきたかきがありませんので、思い切って何とかいつものようにトレーニングを開始したのです。するとどうでしょう。痛みのある部分がどんどん小さくなってきて中心部だけになってしまいました。

それから何日か経つとしこりみたいなものができて痛みは完全になくなってしまったのです。さらに2週間ほどしたある日、突然鼻から血痰が出たのです。もちろん、血痰が出たことにより蓄膿症は完治して、それからは何の痛みも症状も出ていません。

元々、虚弱体質で病気がちの私でしたが、トレーニングをするようになってからというもの、体の中の悪いものが全て外に出てしまっ

ているような感じでどんどん体調がよくなってきています。つくづく人間の体というのは不思議なものだということを知られました。あれだけ長い期間、苦しみ、病院に行ってもかんばしい結果が出なかったものが、週1回のトレーニングでよくなってしまいうのでから感謝の言葉以外にありません。

今では私の変わりように興味を抱いたのか、息子2人もいっしょにトレーニングをするようになりました。もっとも彼らは私のようにただ、ボードの上に乗っているだけでなく、本格的にウィンドサーフィンを楽しんでいます。

第一章 教育荒廃、情緒障害児多発の社会的背景

「厳しい自然としての人間」

氏の座右の銘である。氏は人間が人間として生きていくための強さを持つことを目標としている。従って、そこで行われてきたトレーニングは、その教育理念に基づいたものであった。つまり、鉄拳一つを取っても確固たる論理的根拠が存在する信念の一撃だったはずなのである。

しかるに、定義付けのなされた体罰と暴力とは同一線上に置いて考えるべきものではなく、区別されなければならないものであろう。

問題は根本から直すことが必要

第二次世界大戦後、日本は目覚ましいばかりの高度成長期を迎え、国民総生産は世界のトップクラスの座を不動のものとし

ました。その結果、人々の暮らし向きは飛躍的に向上し、まさに、今巷で話題となっているバブル経済の崩壊というところまで一気に駆け上がってきました。

しかしながら、その繁栄ぶりとは裏腹に、社会的には至る所に歪を生じさせることとなったのです。政治の腐敗、そして不信、教育問題、環境汚染問題、福祉低レベル問題など、どれをとっても、決して一朝一夕では解決できない難問ばかりです。とりわけ、教育問題は非行、登校拒否、落ちこぼれなどといった様々な形でその歪を呈し、教育現場の荒廃ぶりを露見させる形となっています。

これらは、ひいては家庭内暴力、犯罪行為などを誘発する引き金となっており、単なる教育問題という域を越えて社会的にも大きな波紋を投げかけているのです。

なるほど、教育関係の識者、あるいは評論家たちも、ただ手をごまねいてもいられないとばかりに、教育現場の充実や教育制度の見直し云々を声高に侃侃諤諤と議論を戦わせ、多額の費用を運用してその見直しを図っているようです。

しかし、登校拒否、非行、無気力症など、いわゆる情緒障害児と呼ばれる子供たちの減少の様子は一向に見えません。むしろ逆に登校拒否児などは増加の一途を辿っているようです。こうした問題児を抱えている当事者やその保護者にとっては重大な問題であることはいうまでもないことでしょう。

事実、私のヨットスクールに訪ねてくる親たちは子供を殺して、自分も死にたいといったところまで追いつめられているケースが多いのです。

しかし、公的教育機関やそれに類する教育の場に、その解決方法があるのかというと確たる策や方法は未だ持っていない状態です。世の専門家はお茶を濁すばかりで、有効的な手立てさえ持ち得ていません。

たとえば、登校拒否まではいかないにしろ、教室では勉強できないが保健室には積極的に足を運ぶ子供たちに、保健室での勉強を許可しようという意見や風潮があります。確かに、これだと子供たちに勉強をさせることにはなりますが、そんな小手先のこと

だけでは、根本的な解決には程遠いといえるのではないのでしょうか。いわば、急場しのぎの苦災としかいいようがないわけです。

では、何を直すのか。それは子供自らが自分を直すしかないのです。

とくに本能を司る「脳幹」をトレーニングにより元の真っ直ぐな状態に戻す、つまり直すことによって、強い子供に生まれ変わります。

この脳幹の働きについては後で詳しく述べるとして、まずは、何故、このように教育荒廃、とくに情緒障害児が多発するようになったのか、その社会背景の問題点から触れることにします。

教育荒廃は 70 年代から始まった

登校拒否や非行などの問題はいつから始まったのでしょうか。問題の底辺を考える場合には、まず、その現象が現れ始めた背景に焦点を合わせるのが常套策。そうすることによって、問題の発生や原点を浮き彫りにして、問題に対処していくのが、何よりの問題解決への道なのです。

不思議なことにこの登校拒否や非行などといった教育荒廃は、先進国でしか起こっていません。すなわち、発展途上国と呼ばれる国々では、まず見られない現象なのです。もちろん、ストリートチルドレンなどのように、あまりにも貧しく学校にも行けなくて路上で生活する、貧しさゆえの罪を犯すケースはまた別問題。これらと、日本に見られる非行、登校拒否、家庭内暴力を同列に並べて論議するには環境があまりにも違い過ぎます。

裕福で生活にも困らない、学校に行く環境が揃っているにもかかわらず、学校に行かない、家庭内暴力を起こす、非行に走るなどの異常な行動を起こす子供たちの存在は先進国特有のものなのです。

このことから、これらの現象をひとつの"文明病"といっても差し支えないでしょう。

この文明病は奇しくも、日本が先進国の仲間入りをした 1970 年代に表面化しはじめました。それまでは不良(非行と不良の違いは後述する)はいましたが、登校拒否、家庭内暴力、非行はなかった。ところが 70 年代に入って多発しはじめたのです。このことは、日本の戦後の成長と何らかの因果関係があるのは火を見るより明らかな事象といっていいいでしょう。

次の項ではこのことについて言及していきます。

戦後民主主義の間違いが教育荒廃を生んだ

ヨットスクールで何百人という情緒障害児を引き受けてきましたが、その子供たちの両親は、昭和 10 年代以降に生まれた人たちばかりでした。斯くいう私もその世代に属しますが、この世代は戦後民主主義教育を受けた最初の人たちでもあります。敗戦によって戦前の軍国主義は崩壊し、アメリカから民主主義が与えられたわけですが、この民主主義の日本的使い方(戦後民主主義)に重大な盲点というか間違いがあったのです。しかし、アメリカから「自由なイデオロギー」を与えられた日本人は、その盲点に気づかず、喜色満面の体で取り入れたわけです。

やがて、自然の成り行きとして、その戦後民主主義の教育を受けた人たちが親になり、子供を育てるようになりました。その結果、前述したように情緒障害児(登校拒否・家庭内暴力、非行すべてが情緒障害児に含まれる。その関係は後述する)が多発するようになったわけです。これは単なる偶然ではありません。キチンとした因果関係があるのです。

その因果関係を説明する前に、まず、民主主義の定義、歴史から振り返ってみたいと思います。

民主主義はデモクラシーを翻訳した言葉ですが、これが適切かという疑問があります。デモクラシーは古代ギリシャ、つまり都市国家時代のポリスに登場した制度です。しかし、時が経つに連れて判明したのは、この制度では到底専制君主制度の大国には太刀打ちできないということです。もっと事実在即していえばデモクラシーでは国家としての求心力がないわけです。だから、自然にそ

の国家体制が専制君主制度や封建制に変貌してしまうわけです。

いうまでもなく、専制君主制の国家というのは権力者が勝手なことを簡単にできてしまいます。それに対抗するために民衆は革命を起こさざるを得ません。しかし、革命を起こしては国は弱体化し生活レベルは下がり、近隣国から侵略されます。そこで、それではいけないということで以前あった民主主義という制度をもう1度見直すことになったわけです。権力というのは長年その位置を占めていくと腐ってくるという特質がありますが、この制度なら腐った権力は取り換えることが可能になるわけです。

つまり、民主主義というのは権力が必要であることを認めたくえで存在しているということができるわけです。民主主義とは権力の交代制を意味しています。民主主義という和訳がまずいので、その本質が歪められているのでしょう。

ところが日本の戦後民主主義というのは、この権力を否定している。そもそも権力がないと国家は成り立たないのに、なぜか権力は悪いという固定的なイメージを国民が抱くような教育がなされてますし、民主主義もまた、人間が作った制度であるにもかかわらず、初めからあったもののように語る風潮があります。

他の国からまったく違った考え方や制度を導入する場合、必ずといっていいほど起こるのが「掘り起こし現象」です。これは昔からあったものをその新しい概念に置き換えたり結び付ける作業、現象のことをいいます。この作業によって、新しいものが自分の風土に合いやすくなるわけです。日本の場合はアメリカから民主主義を受けてから、それに似たものとして平等主義をくっつけたわけです。つまり、日本の戦後民主主義というのは、日本古来の平等主義をミックスしたもののなのです。

その名残がいろいろなところで見受けられます。たとえば、日本企業の社長はアメリカと比べてそれほど高い給料を取りません。クライスラーのアイアコッカは何億円という給与を取りながら、社員のクビを平気で切るわけです。だけど、日本の場合は社長と平社員でもそれほど差はない。これが平等主義の端的な例です。

こうして平等主義と民主主義がミックスして戦後民主主義の制度が始まったわけですが、問題は子供まで平等だと言いはじめた

ところにあります。これはじつに歪んだ平等観としか言いようがありません。

大人と子供が平等というのは空体語だと私は思います。しかし、みんな心では大人と子供は平等ではないと思っていながら、決して口に出して言わないし、言わそうともしない。言ってもいけない。

それで世間では基本的人権とか子供の自主性という言葉を持ち出して平等に扱おうとするわけです。

ここにひとつ疑問が生まれます。ホントに平等に扱うなら、何故、選挙権を与えないのか。結婚の権利を与えないのか。不純異性交遊や非行少年という言葉も生まれませんか。これは極論を言っているわけではありません。平等と子供の自主性と矛盾点を明らかにしているだけのことです。さらに言うならば、ホントに子供の自主性を認めているのであれば、学校は成り立たないわけです。初めから自分の自主性で学校に行かずに、自分の自主性で学べばいいわけです。

この子供の自主性ということには、ひとつ大事なことが欠落しているのです。自主性というのは子供が初めから持っているものではなく、教育の過程で作りに上げていくものです。あるものでなく、つくるものです。そこを考えていないと大きな間違いが起こります。いや、すでに現実化しているのです。この自主性の問題は平和を考えるのと同じで、日本のように一見、平和に見える国では平和は初めからあるものと思われがちですが、決してそうではないのです。平和もいろいろな方法を用いながら勝ち取られているわけです。

自主性の尊重によって躰ができなくなった

平等観、あるいは自主性とかいった問題による弊害は、やはり戦後民主主義に起因していると考えていいと思います。さらに、やっかいなことにその戦後民主主義の平等意識を子供の教育にも適応することによって、いろいろ問題が起きています。子供たちの自主性を尊重する。一見もっともで正論のように聞こえ

る考え方を実践した結果、教育荒廃に至ったのは周知の通りです。

安易に子供の自主性を信じてしまった故の落とし穴ともいえるでしょう。

では、何が必要なのか。まず、もう1度スタート地点に戻って「教育」を考えなければいけません。つまり、教育とは何かを考えることから始めなければいけません。

たとえば、「躰」という言葉があります。情緒障害児が多発する前、つまり戦後民主主義が浸透する以前の家庭では、この躰がきちんとできていました。親は、子供が悪いことをしたら感情のままに怒っていたわけです。つまり、自分の本能で子供を育てていました。ところが「子供を感情のまま叱ってはいけない」「子供を理性的に育てる」「子供の自主性を尊重しろ」という専門家の言葉を信じるようになって、何を怒って、何を褒めるのかわからなくなってしまったのです。従って、子供が同じような行為をしてもあるときは怒り、あるときは褒める。これでは子供は何を基準にしているのかわからなくなって当然です。つまり、善いことと悪いことの基準判定があいまいになったということです。本能、感情のままに躰をしていたときには統一性があったのが、自主性の尊重などというきれいごとの理性で考えるようになった時点でわからなくなってしまったのです。

躰は感情のままに行う

躰は感情のままに行うことが必要です。子供がテストで100点を取れば親としてうれしい。当然のことです。だから褒める。反対に子供が万引きをしたら、不快感が発生します。だから、怒る。自分が快感を感じたら「賞」、反対に不快感を感じたら「罰」を与えればいいのです。じつに簡単なことだと思いませんか。これが、また、親と子の絆を確かなものにしていくのです。

ところが、「感情のままに躰をする」といえば、次元の低い親と批判する人がいます。人間が他の動物と比べて優れているのは理

性があるからだ、その理性を軽んじるとは何事だと。たしかにもっともらしい意見に聞こえます。しかし、少し待っていただきたい。

その考え方は理性に対する過剰な期待としか言いようがありません。たとえば、下世話な例えで申し訳ありませんが、70歳を過ぎたおじいさんが、いわゆる風俗店というところで女遊びをする。本能としての生殖機能はすでに役に立たない。しかし、理性がムチ打ってそこに足を運ぶわけです。「本能という荒馬を理性という騎士が乗りこなす」という言葉がありますが、実際は逆の場合も多いのです。この例では死にかけて本能に理性がむち打ち、何とか生かそうとしているわけです。このように間違った理性が問題となることは仏教で説明されていますので、後で詳しく説明します。

親が自分の本能、感情を信用せずに外部から与えられた理性、それも間違った理性、つまりきれいごとで子供を教育する。それによって大きな問題が子供の上に起こるわけです。その問題の核がいわゆる子供の自主性の尊重という不思議な言葉です。

愛では子供を救えない

子供の自主性の尊重ということは元をたどれば戦後民主主義の考え方に行き当たるのですが、これを教育の場に持ち込んだのは教育者と呼ばれる専門家や評論家の人たちです。そして、そういう人たちの意見や学説を母親たちが何の疑いもなく素直に受け入れて実践してしまっているのです。

さらに、この自主性と同じように、専門家の皆さんがよく使われる言葉に「教育は愛だ」というのがあります。私も何度か言われたことがありました。「戸塚君、教育は愛だよ」と。しかし、現実を見渡してみると、自分の子供に愛を持たない親がいるのでしょうか。ヨットスクールに来た情緒障害児も親の愛を一身に受けている子供たちでした。それでも、異常行動を起こすのです。愛情表現をすればするほど悪い方に向かう例はいくらでもあります。はっきり言わせていただくなら「愛では問題は解決しない」ことはもちろん、教育の根本は愛ではありません。

この「教育は愛」はあくまでも建前論なのです。本音ではない。これを流布したのは先にも述べたように専門家たち評論家で、それを信じ込んだのが女性たちなのです。

何故、女性が信じて実践したのか。

答えは簡単です。それは、女性は第一に権威(と呼ばれるもの)に盲従する傾向があること。第二に愛が何よりも好きなこと。第三に本音よりも建前が生理的にフィットしているからです。自分を飾りたがる特質は、その生理を顕著に表しているいい例でしょう。お化粧して、ファッションに気を使い、髪をセットアップして、自分を美しく見せようとします。もちろん、これは悪いことではありません、いいことでしょう。自分を美しく見せることで、より優れた男性を引き付けることができるわけですから、この行為自体が本能なのです。しかし、これは、ある意味では世の中を円滑にする効力がありますが、度が過ぎると弊害になります。

つまり、飾るのが肉体的なことや見かけのものであればよいのですが、精神も着飾るようになってしまうのです。自分がどれだけ素晴らしい精神を持っているかを強調しようとする。他人にいい人と思われようとする。そうすることによって、建前論つまりきれいごとになってしまうのです。

教育に関する建前論があまりにも世の中に多過ぎる。これが問題なのです。その元凶を作った専門家、評論家諸氏、そして女性に取り入って経済的利益を計るマスコミの責任は重いといえるのではないのでしょうか。ヨットスクール批判をやったのはまさに、これらの本当に責任をとらねばならぬ者たちでした。

教育には男と女の論理が必要

我々が存在する本来の目的は種族保存です。これは他の生物となんら変わるものではありません。頭の良い人間は何とかして、自分自身のために自分が存在することを立証しようとするが、こればかりは何ともなりません。従って、我々の精神活動もその目的は種族保存です。

教育してやろう、教育せねばならぬ、と大人は考えるわけですが、子供を見て、思わずそう考えてしまうのも種族保存に基づく精神活動ということになります。

ですから、もし教育や躰に関して男の精神と女の精神で違うところがあるなら、それは種族保存に必要なからそうなっているのです。このことは男女間の肉体的な違いを考えればすぐにわかります。

ところが、今の日本は男の精神を即座に否定するという乱暴な国だから困るのです。教育というものの根幹をもう1度考えてみましょう。人間を動物としてみれば良くわかるように、教育というのは一人前でない者を一人前にすることです。男の場合なら、一人前の男とは、女に子供を産ませる、女・子供・群れを敵から守る、餌を取ってくる、という基本的な3つの仕事ができるような男のことです。これらの能力に1つでも欠ければ女は自分を選んでくれません。

だから男は、この能力が1つでも欠けると、とたんに自信をなくしてしまいます。インポになった時、大病や大怪我をして闘う能力がなくなった時、破産したり会社を首になった時、つまり、肉体的にも、精神的にも、社会的にも人間的にも、しっかりトレーニングをして強くなっておかなければ、本当の自信等あるはずがないのです。勉強だけできてもだめで、デブでもだめ、ピーターパンでもだめ、甘えん坊もだめ。彼らには本当の自信も自尊心もできません。あるのは強がり、虚栄心です。知育偏重で学校の成績だけが良くても、それは餌を取る能力にプラスになるだけですから、本当の自信とはなりません。学校の成績や大学だけで本人の価値を決められれば、本人はうれしいにしても本当の男の価値とは程遠いものだから、戸惑い困ってしまうのも本人です。逆に知育偏重は、成績の良い子に過大な価値を与えてしまうので、本当の男になるためのトレーニングの機会を奪ってしまうのです。そして、世の中に沢山いる、ただ頭がいいだけのいやな男、いない方がいい男に成り下がってしまいます。

元々、男は子弟の教育にあたって、その戦略的な部分を受け持ちます。男の基本的能力をトレーニングし、家庭と社会に役立つ男にしようとする。子供の10~20年先のことを考えてしごき

ます。その為に子供に精神的負担を与え、大きな不快感を発生させ、それにより子供が行動、すなわちトレーニングをするように仕向けます。

一方、女はトレーニングやしごきに疲れた子供を優しく迎え、食事をさせ、清潔な衣服を与え、風呂に入れ、肉体的にも精神的にも明日のトレーニングのための活力をつけます。つまり、男がちゃんと子供の教育に責任を持ってくれば、あれやこれやと口出しする必要はないのです。今の日本の社会のように、男が子供と接するチャンスをなくしてしまったところでは、どうしても本当の教育は時間的に無理です。「子は父親の後ろ姿を見て育つ」とうそぶいても、後ろ姿が物理的に見えません。父親は子供をしごくどころか、たまに会った子供とうまくやりたいがために逆に機嫌をとってしまいます。子供に不快感を発生させようとせず快感を発生させようとします。そして、このようにその場だけをうまくやろうとするのは責任ある父親の態度ではなく、無責任なよそのおじさんの態度なのです。父親は子供の将来をうまくやろうとし、母親は今をうまくやろうとする。この2つが重なって子供の教育ができるのであって、どちらがより重要ということはありません。肉体の違いと同じように精神の違いは、必要だからあるのです。もし、男女の役割にメインとサブがあるのなら、それも必要だからあるのです。

このように、男女の違いを分け、その分け方が何となく女性に不利に見えたり、女性の方が社会的に低く見える時、必ず進んだ女性からの反発があります。男女の違いはあるものであって、創るものではありません。その進んだ女性が、体罰反対を叫びヨットスクールの糾弾をわめくなら、彼女はまさに女性そのものなのです。自分は(女は)体罰を決して認めない、だからお前も(男も)体罰をしてはならないというのは、女の性器は正しいが男の性器は間違いというに等しい言い分なのです。たまの週日の休みがあったとします。お父さんは久しぶりに普通の日のテレビ番組を見てびっくりします。モーニングショーです。あのスターとスターがくついたの離れたの、あの先生が子供にくっついてかかって怪我をさせたの、そして結論は決まっています。「弱い者が正しい！」お父さんはアホらしくなって、衛星チャンネルに替え、アフガン、フィリピン、C I S、ユーゴの情報を得ようとします。お母さんはすぐにチャンネルを元に戻します。

女性が自分の立場だけが正しく、男は間違っていると言うなら、それは「天道説」に他なりません。自分の寄って立つところが確固たるものであり、動かないと信じ切っているのです。現代日本においては、男が子供たちの教育を物理的にしろ、精神的にしろ放棄してしまいました。しかたなく女が教育の主導権を握らざるを得なくなったわけですが、やはり、それ故の欠陥が出てしまいました。男と女の本能的な違いの部分を理性では完全に解決できないからです。まず、女が子供の今を大事にするという本能が裏めに出て、トレーニングの否定をしてしまいました。みんな仲良く、危ない遊びはやめなさい、いい子はここで遊ばない、子供を殴るとは何事だ、子供の自主性尊重、子供は天使、子供の心は真っ白、叱るより褒める、体罰絶対反対……等々の教育や躰におけるたわ言の大量生産となってしまいました。男の弱々しい本能的な反対も、マスコミの経済事情により後押しをされた「愛」という印籠をふりかざされれば、平伏せざるを得ません。女性が愛をお好きなのは当然のことです。それは女性に大きなプラスとして働きます。それに愛は快感ですので、時には愛の押し売りもします。だけど、決して「愛が全て」ではありません。

もう1つは、守るのが男の本能なら、守られるのは女の本能です。弱い者は自分を守ってくれない、不安だからできるだけ強い者の傘の下に入ろうとします。まして自分より弱い子供は大きな傘の下に入れておいてやらねばならないのです。だから大企業に入社させたい、そのためには一流大学に入れねばならぬと考えます。その結果、知育偏重になるのです。そこでは、男が本能的に持っている自分の実力で一步一步成り上がっていきたくて、という願いは一顧だにされません。逆に権力の下に入ろうとする者は成り上がり者が嫌いなのです。せっかく手に入れた権力の傘を壊そうとする敵だからです。

このように、意図的にしろ、成り行きにしろ、男の怠慢が教育荒廃を招いたのです。元に戻すのには困難が伴いますが、原因さえわかればその原因を取り除く方法は必ず見つかります。

家庭で役割分担をすることも必要

さて、教育には男と女の役割があるといいましたが、これを子供の前できちりと見せなければいけません。つまり、父親の強さ、そして母親の優しさを子供が身体で知ることが大事なのです。

こうした役割ができていないと、子供が情緒障害に陥りやすくなります。ヨットスクールに来る子供の家庭は、その8割以上が相対的な天性の弱さ、つまり、父親が男らしくない人か、母親が強すぎるか、母子家庭であるかなのです。とくに父親が弱いということは、子供は自分を守ってくれるはずの存在が信用できないということです。外から敵が来た場合に、守るはずの父親があてにならないとなると、自分で自分のことを守るしかない。すると、自分が弱い存在であることを本能的に知っている子供は、大変な不安になります。それが、情緒障害を起こしやすい精神状態をつくりまします。

そうした見地からも、家庭では父親は強くなければいけない。少なくとも子供の本能には強く見えなければならない。

ここで、私は、子供の"本能に"という言葉を使いました。そう、理性にではなく本能になのです。理屈と鳥もちはどこにでもくつつく。理性はどんなにでも都合良く変えることができますが、本能はまことに頑固で自分の都合に合わせて変えることは不可能です。

「系統発生的に生じた行動のプログラム」これが本能の定義です。本能は地球の生物の歴史、45億年の歴史が刻まれているのです。それをわずか40数年の歴史しか持たない戦後民主主義で否定しようとしても、どだい無理な話です。45億年の試練に耐えたものをちやちな頭で考えた、ちやちな理想、いや夢想でもって否定しようなどと大それたことを考えてはいけません。赤ん坊と小錦よりはるかに大きな差があるのです。テレビや新聞で聞いたふうなことを嘘ぶいて金と名誉を得ている連中は、仏様の手のひらの上の孫悟空、エコロジーを唱えながら地球の歴史の中の自分の立場など全くわかっていない脳天気、だから問題児のことに首を突っ込むのは大歓迎しますが、己の持つまことにちやちなソフトウェアで、問題を情報処理し、それこそ正義だなどというなら、それはとても本人ではつぐないきれない罪を犯していることになるのです。

本能はその歴史の重さ故に、自分の力で変えることはできません。しかし、その情報処理の仕方が理性ほど精密でないが故に"だます"ことはできます。ヨットスクールでは、この方法を使って、脳のトレーニングを行っているのです。

1つ例を挙げてみましょう。

赤熱したストーブでやけどをしたネズミは、赤くペンキを塗ったストーブにも近づかなくなる。熱い物に触らないのは本能です。この例では人間がいたずらをして、熱い=赤い、とネズミの本能をだましたわけです。

父親は強くなければならないと要求されても「任せておけ」と言える男がどれほどいるでしょう。昔なら8割はいたでしょう。今は、1割もいるかどうか、。これもご時世です。でも考えてみれば昔の男が、今の男に比べて本当に数段強かったのもやはりご時世、中には弱いのに強く見えた父親もいたことでしょう。この方法は現代でも使えそうです。

要は子供の本能が、父親は強いと誤解すればいいのです。理性に比べ、精密な情報処理の苦手な本能は、それ故にだまされやすいという部分があります。ネズミの例のようにすれば良いでしょう。それに子供の本能は自分の父親は男らしい、と思いたがっているに違いありません。

では、男らしさとはいったいどういうことをいうのでしょうか。

男らしさとは、基本的な3つの男の仕事をちゃんとこなせることです。セックス、金、力の3つです。セックスは、その能力の結果、子供の自分が存在するのだから今はどうあれ、その能力は子供には問題にならないでしょう。奥さんにとって問題になるかどうかはまた、別の問題です。

次の金(餌)を取ってくる能力はどうでしょう。銀行振り込みが定着し、給料日の行事がなくなってしまったことにより、子供には誰が餌を取ってきているのかが大変わかりにくくなってしまったのです。ここは、お母さんが一日中機嫌が良く、お父さんご苦労様を繰り返し、酒を1本余分につけるとい昔のあの儀礼を復活させれば、子供に充分理解させることができるでしょう。

最後は力ですが、これは難しい。弱いはずの女(母親)にガミガミ言われておそれている父親に、子供が力を感じるわけがありません。といて、母親をぶん殴るわけにもいきません。ましてや自分の機嫌を取り、顔色ばかりをうかがっている父親が強いはずがありません。そこで何とか、その点を解決するために昔の方法の中に解決策のメカニズムを探ってみるわけです。昔の父親だって、本当に強かったのは5割程度でしょう。それなのにほとんどの父親が強く見えたのは、家族や親戚、社会までが父親をたて、強く見せたからでしょう。今日そんなことをしなさいといえ、時代錯誤のアナグロと総攻撃を受けることでしょう。しかし、せめてそのメカニズムを使うだけなら、お許しいただけるのではないのでしょうか。

群れを動かしていくのは、その群れの中で1番優位の者です。つまり、本当に強い者が政治を行います。逆に、政治を行う者は強い男と本能が思ってしまうのです。家庭の方針を決定したり、許可を出したりする父親は、子供の本能にとって、頼りになる強い父親なのです。

「お父さん、今日の夕食何にします」「そうだね」「魚でいいですか」「それでいいよ」たったこれだけのこと。どうせお母さんが全てを決定するにしても、子供の前でのこの一見単純にも見える芝居が子供を安定させてしまうのです。「うちのお父さんは、お母さんより強いぞ。きっと、いざという時、僕を守ってくれる。だから心配しなくていいんだ。安心だ」

それを具体的に行動しようとするれば、当然、母親の協力も必要になります。つまり、父親の権威を上げるために一芝居打つことも必要になるわけです。たとえば、かつては一家の大黒柱として家族が生きていくため働き、お金を稼いでくる父親の姿が具体的に見えました。給料日には必ず給料袋を持って帰っていた。ところが、銀行振り込みになってからというもの、その姿が見えなくなっています。だから、給料日には父親を上座にすえて感謝の気持ちを家族で表すようにすることが必要になるのです。

それから、これは難しいことかも知れませんが、家庭の決定権を父親が持っているところを子供に見せつける。これも子供に対して非常にいい効果を与えることとなります。どうしてこういったことを述べるかというと、元来、政治とは1番強い者が取りしきるものなの

です。そこで家庭内でも何事も父親が決定をする場面を見せつけるわけです。もちろん、買い物や料理の献立などはすべて母親の決定で行われるわけですから、大方の家庭でのホントの決定権は母親が持っています。

ところが、お芝居でもいいから、母親が父親にお伺いをたてるという形で、「今日のおかずは焼き魚でいいですか」と一言でいいから言うと大きく違ってくるはず。当然、それで、父親はすでに母親が決めていることだから、そこで「いいよ」と言うだけでいいわけです。

これぐらいのことは簡単にできるのではないのでしょうか。初めは照れ臭くてもすぐ慣れることです。もちろん、これだけで子供はずいぶん違ってきます。軽い登校拒否児ならば直ります。事実、そういったアドバイスをして実行された方のお子さんは簡単に直ってしまいました。

情緒障害の根っこは全て同じ

我々は登校拒否や非行などといった子供の行動異常ばかりに目が行き、それを問題にします。それらは目につきやすいし、"子供の道"に反しているからでしょう。ヨットスクールでも最初はそうでした。しかし、多くのこれらの子供たちと接しているうちに、他にもいろいろな"欠陥"があることがわかってきました。

量初に気がついたのは、トレーニング前に生徒の健康診断をするようになった時です。それまでは入校前に各自健康診断をしてもらっていたのですが、医者が十二指腸に穴が開いていたのを見抜けず、トレーニング中にその子が腹膜炎で死亡するという事故があったので、スクール側で検査をすることになったのです。

すると出るわ出るわ、情緒障害児は病気の巣窟でした。肝機能障害、肝炎、腎炎、不整脈、白血球過多、白血球不足、慢性的頭痛、瞳孔反射異常、メニエル氏病と思われる耳鳴り、蓄膿症、アレルギー性鼻炎、扁桃腺肥大、膝蓋腱反射異常、血色素過少、胃・十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎、関節リュウマチ、若年糖尿病、小児喘息、アトピー性皮膚炎、ネフローゼ、パ

ーキンソン氏病等々、難病を含め、ありとあらゆる病気が出てきました。それもほとんどの子供から出てくるのです、さらにびっくりしたのは、それらがトレーニング中に直ってしまうことです。この事実は、非行や登校拒否の原因とこれらの病気(いわゆる心身症であろう)の原因は同じものであり、ヨットトレーニングはその原因を取り除くと考えてもさしつかえないと思われるのです。

小児科医の立場から、問題児(情緒障害児)を扱った某医師は、これらの子供たちは

心身症→問題行動→神経症

の経過をたどると発表していますが、その通りでしょう。非行や登校拒否は心身症や神経症と同類と考えれば良いのです。心理や教育畑の人と我々が噛み合わないのも、ここに原因があるのです。もっとも、神経科ともうまくいかないが、それは神経症の原因に対する、あるいは神経症の定義に対する考え方の違いでしょう。

ヨットスクールには神経症まで進んだ子供も大勢来しました。不安神経症、強迫神経症、恐怖症など。そして、それらは全てヨットトレーニングで"直って"いるのです。

ヨットスクールで実際に起こった事実から、私は「脳幹論」という仮説をつくりました。

それは

「文明病の原因は脳幹の虚弱である」

という簡単なものです。実際は脳幹のみでなく脳神経系すべてが含まれるのですが、脳幹にスポットを当てるのが1番わかりやすいでしょう。

教育荒廃や難病の多発、おかしな事件。昔はなかったこれらのものは現代病、文明病として何となくまとめられています。それらが同じ原因で生じるといってもわかには信じられないことでしょう。癌と非行は同じ原因だといわれても、すぐに「同意する」と言ってくれる人はいません。

しかし、脳幹論を使うとそれら全てが実にうまく説明できます。癌は脳幹の虚弱、膠原病は脳幹の狂い、非行は脳幹と辺縁系の虚弱、登校拒否は脳幹と辺縁系の狂いというふうを考えれば辻褄が合います。そして"狂い"というのは、調節機能の低下と同じことなのだから、全てが「脳神経系の機能低下」で説明可能になるわけです。

神経症とは本能の狂いである

我々はあまりにも精神、特に理性を高く考えすぎているようです。それが問題児の本質を見えにくくしています。人間は、他の人より上になりたいという気持ちが非常に強いものです。だからこそ、これほどの進歩もしたのでしょう。ましてや、他の動物よりはるかにすぐれた上等なもの、と自分を考えます。その理由は人間の精神、特に理性にあるのです。理性は素晴らしいもの、神聖にして冒し難いものとなってしまふ。

しかし、家庭内暴力や非行少年が言い訳に遣うへ理屈も理性なのです。理性には正しいものも間違ったものもあります。それがわからないから、非行少年の"へ"のような理屈をまじめに検討分析し、揚げ句の果て、訳がわからなくなってしまうのです。本能は嘘をつかない。しかし理性はしょっちゅう嘘をつきます。

登校拒否や非行少年を情緒障害児と呼んだ時期がありましたが、これはまことに当を得た言葉です。今、それがあまり使われなくなったのは、この問題の権威にとって、うまく使えない言葉だからでしょう。ましてや、この子供たちを逆に自分たちの勢力拡大に利用しようとする日教組は「『管理社会』や『体罰』が非行や登校拒否を生んだ」と原因と結果を本気で逆転させ、それを朝日型マスコミやおばさんにうけることに血道をあげるテレビのキャスターたちが訳もわからないままに"正しい事"としゃべりまくる。何という馬鹿さかげんでしょう。

情緒とは、英語のエモーションの和訳です。エモーションは情動のこと。つまり本能のランクにおける感情のことです。情緒という日本語が何となく"高級な感情"というイメージがあるのでわかりにくく

なっていますが、「情緒が障害された」ということは、本能が低下したとか、本能が狂った、とかいう意味にとれば良いと考えられます。

我々人間は、その頭の良さ故に、本能と違った理性をつくり上げることができます。たとえば、サラリーマンが見るからに憎たらしい上司の子供に「いいおぼっちゃんですね」とぬけぬけと言ったり、自分を大人物に見せるためには、怒り狂っている時に、にっこり笑って見せたりすることがあります。あるいは、もうその役目を終えたおじいちゃんがソーブランドで何とか己を奮い立たせようともします。本能と基本的には同じはずの理性を自分に都合の良い理性に変えてしまう。これが建前論であり、へ理屈ということです。本能と理性の乖離ですが、人間はこれを意図的に行います。

情緒障害や神経症にも同じことが起こっているようですが、これらの場合は、建前論とは逆に、本来狂うはずのない本能の方が狂ったために同じ結果(理性と本能の乖離)が生じているようです。種族保存を目的とする情報処理本能が狂ってしまえば、それが危くなるのはしょうがないことです。

神経症とは本能が狂った状態ではないかと私が思い始めたのは、34歳の「仕事が長続きしない」と訴える男をトレーニングした時でした。彼は不安神経症の診断を受けていましたが、本人も常に不安であるという症状を訴えていましたし、会社を何度も辞めてしまうのも「人が自分の悪口ばかり言う」「上司が怖い」等の理由だから、妄想もあり恐怖症もあったのでしょう。

彼は海に入るのを極端に怖がりました。背の立つ所、腰の深さまで入れと言っても駄目で、膝まででいいからと言ってもそれすらできません。そこで我々は彼の父親としての本能にすぎることにしたのです。6歳になる彼の長男も既におかしくなっており、普通の子供なら波打ち際に波と戯れるはずなのに、その子は5メートル位離れた所から座ったまま、波が押し寄せたり引いたりするのをただじっと見ているだけという状態でした。私は、ある方法を使って1時間ほどでその子を海に入れ、泳げるように、そして少しなら潜れるようにしました。背の立たない所でうれしそうに泳ぐ自分の子供を見て、さすがの父親も発奮し、海に入ろうとしましたが、やはり波打ち際は越せませんでした。

結局、この父親は我々の強制によりトレーニングを開始し、症状は完全に克服され、今は自分で事業をしているようです。

現代は残念ながら自主性尊重ということで必要があっても強制力が使えず、なかなかうまくいきません。神経症の人の自主性とは、いったいかなるものなのか。神経症の人に自主性を要求するのは「車イスで階段を昇りなさい」というのと同じことではないでしょうか。不安神経症は理由がなくても不安なもので、ましてや、何か理由があれば不安どころか恐怖を感じてしまうというものなのです。

海は誰でも怖いものです。もし、怖くなったら人は平気で海に入って行き、死んでしまいます。しかし、浅い背の立つ所、しかも腰の深さ程度ならそれほど怖くはありません。それが波打ち際を越えられないほど怖いということになれば、それは脳による情報処理が狂っているのです。そうした症状がヨットトレーニングで消えたのですから、ヨットにより脳のトレーニングが行われ機能が正常に戻ったのでしょう。つまり、直ったのです。トレーニングにより直ったのだから、トレーニング前は弱かったと言わざるを得ません。

「弱い者は逃げる」これは真理です。街中でそのスジの人が前からやってきたら、本能的に目を伏せ、目が合わないようにします。金は何より好きな女をめぐって金持ちの男と張り合うようなことは初めからしません。弱い者は逃げるよりほか方法がないのです。逃げたくなければ強くなるしかないのです。

登校拒否、非行、家庭内暴力、問題児、情緒障害児等と呼ばれる子供たちをよく見ると、彼らに完全に共通しているのは「逃げ」です。甘えも逃げ、ピーターパン・シンドロームも逃げ、オタクも逃げ。逃げの反対は攻撃、つまり、立ち向かうことです。ですから、彼らが本来の目的に向かって立ち向かっているかどうかを考えてみるといいでしょう。一見攻撃的に見える非行や家庭内暴力もその本質は逃げであることがすぐわかるはずです。そして、我々は、ミクロの世界で起きている癌も免疫系の逃げということで説明可能とみえています。つまり、文明病と呼ばれているものは、全て「逃げ」が共通項なのです。逃げ方の種類が様々にあるだけで根本はなんら変わりません。

危機感の中でのトレーニングが必要不可欠

情緒障害もこれらのことを前提として考え直してみるといいでしょう。その本質が理解できるはずです。すなわち、非行や登校拒否を脳の機能低下から説明すればいいのです。まず、非行から考えてみましょう。

昔は不良と言っていたのに近頃は非行と言います。不良と非行は同じものなのか違うのか。結論から言えば非行と不良は違います。どちらも反社会的行為をしますから一見同じように見えますが、その目的が明らかに違います。我々は少年たちが平然と反社会的行為をするという現実を目を奪われ恐怖すら感じます。しかし、行動には必ず目的があります。彼らが大人の犯罪と同じ目的で反社会的行為をやっているとしたら、それは大変なことです。将来、日本は犯罪者ばかりになってしまうでしょう。

非行の例として、集団万引き、暴走族、噴水族をみてみましょう。噴水族というのは名古屋でアベック殺しをした連中のことです。公園の噴水の周りでシンナーを吸うので、この名前がつけられましたが、この3つは非行です。これらの非行に共通するのは

- 1、集団を組む
- 2、悪いことをわざとわかるようにする

の2つです。が、これは彼らの反社会的行為が犯罪とは言えないことを示します。

不良は利益を目的として罪を犯します。力や知恵を使うことにより、金、物、女、名誉を非合法的に得る、あるいは奪います。そして、それによる損失は防ごうとします。利益が目的ですから、捕まってしまうのは元も子もありません。つまり、行動と利益の収支を取ろうとします。従って不良の犯罪は理性的な行為なのです。

それに比べて非行は、この収支が合いません。集団万引きはつまらないものを盗みます。もし、見つかったら社会的に受ける制裁の方がはるかに大きいのです。とてもボールペン1本盗んだくらい

では引き合わないというしかありません。それにどうして集団を組むのでしょうか。銀行強盗をするわけではないのですから、大人数は必要ありません。犯罪はできるだけ少人数で、こっそりとやるものでしょう。ボールペン1本なら1人でいいのに集団でやるからすぐに見つかるわけです。もしかしたら彼らは内心で見つかることを期待しているのではないのでしょうか。

暴走族に至ってはもっとわかりません。彼らのあのけたたましさは一体何なのでしょう。馬鹿まるだしのあの姿は、嫌われ者になることを内心望んでいるとしか思えません。人に迷惑をかけることを喜んでいるわけではないでしょう。迷惑をかけても大した利益は得られません。いったい彼らのあの訳のわからない行動と目的は何なのでしょう。

噴水族のアベック殺しは非行がエスカレートして、ついに殺人にまで至ってしまった例です。本来、非行は反社会的行為による利益が目的ではないのだから、強盗や殺人等、大それたことをする必要はありません。しかし、反社会的行為もだんだん慣れてしまいエスカレートしてしまいます。また、非行と不良は同居しているので、不良性の高い非行や不良の少年がリーダーになると、とんでもないことをしてかしてしまいます。その点、マスコミと問題児は非常によく似ています。マスコミの中に非行と不良のミックスを見出すのは簡単なことでしょう。

噴水族は本来、噴水の周りでシンナーを吸う族です。これもまた不思議です。シンナーを吸うのが目的であれば、何故、家の中でこっそりと吸わないのでしょうか。何故、人前でわざとわかるように反社会的行為を集団でするのでしょうか。ここに非行の特殊性と解決法があるのです。

非行は理性的ではありません。それなら、本能の中にその理由を探せばいいのです。これまで見てきたように非行とは反社会的行為を群れをなして行うという特徴があります。反社会的行為の方に原因が見つからないのなら「群れ」の方に焦点を合わせればいいわけです。10代の子供たちに必要な群れは、本能的には2つあります。1つはもちろん家庭です。そこにいれば守ってもらえ、

エネルギーさえ与えてもらえ、教育もしてくれます。この方は満足されています。しかし、もう1つの方が問題です。

少年は社会の一員となるためにトレーニングをしなければいけません。そのためには社会に出ていかなければいけません。家庭から社会に出ていくということは親の保護からも出ていくことを意味します。エネルギーはまた家に帰ったときに補充できますが、他の脅威から守ってくれる親はいないのだから自衛するしか方法がありません。しかし、少年は動物的には幼体ですから成獣にはとてもかまいません。つまり、そのために少年は危険の中で大人になるためのトレーニングをしなければなりません。この解決策として、本能は親友のメカニズムを生み出しているのです。1人ではとてもかまわないから、弱い者が群れをつくり、強い者に対抗します。親友というのはただの友達ではありません。お互いに命まで守り合う重要な群れなのです。ところが、今の少年たちには友人はたくさんいるのに、この親友がないのです。これは本能が弱いから本能的につくれる親友をつくる能力がないことから生じています。

少年は大人になるために社会でトレーニングを受けなければなりません。だから、本能的に社会に出ようとします。社会に出るためには親友が不可欠なのにそれがつれない。親友がいないと生命の危機すら感じる不安が付きまといます。この不安感から何とか逃れたいと思い、ここで人間お得意の手段と目的の逆転が行われるのです。不安という不快感は親友をつくるための手段なのに、不快をなくすことが目的になってしまうのです。

物分かりが悪くとも強い大人を欲している

社会に出ると必ず敵が存在します。だから幼体は結束して敵に当たるのです。数十年前なら敵ははっきりとその正体を露にしてみましたから、結束もしやすかったのですが、現代社会においては敵のくせに味方のふりをする大人や弱くて敵たり得ない大人ばかりです。そのことも親友をつくりにくくしている大きな原因です。そこで非行少年は、まず自分たちが反社会分子、社会の敵であることを装います。集団万引きをし、暴走を繰り返し、公然とシンナーを

吸う。こうして自分たちを1億2千万人の敵とすることにより、やっと自分たちも敵を目の当たりにすることができるのです。だから、自分たちは親友にならざるを得ない。これで、親友のいない不安感から開放されるわけです。

これら異常行動の多発の背景には、子供に対して物分かりが良いのをいいことと思ったり、あるいは叱るより褒めるのが「いい大人」という女性化社会に問題があります。そういった社会が子供を非行に走らせているのです。また、朝日型マスコミ論調、日教組的教育が子供をして反社会的行動を取らざる得ないように仕向けているともいえます。彼らが非行少年に理解を示すのは、少年たちが自分たちの哲学の成果であることを内心知っているからに違いないのです。

ここでついでに異常な殺人にまで至った例について述べておきます。幼女連続殺人事件、噴水族によるアベック殺し、女子高生殺害コンクリート詰め事件。新聞によれば、これらの「凶悪犯」に共通しているのは「罪の意識のなさ」です。あれほど大それたことをしながら罪の意識がないとは、何とふてぶてしい奴だ、けしからん、と言いたいでしょうが、そうではありません。罪の意識という本能は、まさにこのようなことを防ぐためにあるのです。強い者が弱い者を殺そうとした時、相手の苦しむ顔や声により強烈な罪の意識が湧いてきます。

この罪の意識という不快感から逃げるためには、その行為を中断するより方法はありません。だから、弱い者を殺さずにすむわけです。彼らがあのような「凶行」を犯すことができたのは、その罪の意識が希薄だからに他ならないのです。このように非行は本能が虚弱だから発生するのであり、その解決法はトレーニングにより脳を強化すればいいのです。登校拒否も同じように考えればいいのです。我々が登校拒否として問題にするのは神経症型のタイプです。何故か学校に行くのが怖くて行けない。無理に行かせようとすると狂ったように泣きわめいたり、冷や汗でびしょよりになったり、身体がガタガタ震えたり、時には失神してしまうケースもあります。本来、怖いよりは楽しいはずの学校がそれほど怖くなるのです。これは学校恐怖症という神経症です。先に例を挙げた不安神経症の男と同じことなのであり、いずれも脳の情報処理の狂いから生じています。朝日新聞のいうような「間違った教育環境からの勇気ある逃避」などでは決してありません。

第二章 人間のメカニズムを探る

さて、1章では情緒障害児の多発する社会背景とその特性に触れていただいたが、この章では、人間が持っているメカニズムを具体的に取り上げていただく。これを明らかにすることによって、今までにわからなかった人間の行動の問題点が浮かび上がるはずである。

不快と快感のメカニズム

我々にとって何ともいやな不快感という感情があります。その反対の快感は何とも素晴らしいもので、不快感が消え快感ばかりになればどんなにいいだろうと考え、そうなるように努力します。「戦争反対平和賛成」「愛が全て」「幸福幸福」「恋愛至上」「美味礼賛」など世間ではいろいろ気持ちよさそうなアドバルーンを揚げています。しかし、本当にそんなことばかりでやっていていいのでしょうか。我々は45億年かかって進化してきました。もし不用なものなら、その間になくなってしまはずなのに、不快感はまだに厳然と存在します。きっと必要だからあるのでしょう。

そういった背景を考えて次のように仮定してみましょう。人間の声が非常に小さくて、1人の人間にしか自分の意志を伝えられないとします。そこで、2人の人間が歩いていて、次の角を右に曲がろうと伝達するのに10秒かかるとします。そうすると10人で歩いていたら40秒もかかってしまいます。千人で歩いていたら一斉に曲がることは不可能です。この場合は大きなスピーカーを使えば一斉に曲がれるでしょう。百万人になったらスピーカーでも駄目です。ならば、各自にトランシーバーを持たせればいいでしょう。生物が単細胞から多細胞になった時も同じことが起こったことでしょう。それぞれの仕事をしている何十億もの脳細胞を一斉に1つ

の目的に向かわせるためのトランシーバーとして、不快感が進化したに違いないのです。実にうまい解決方法ではありませんか。快は善い、不快は悪い、と我々の脳が判断するようにしておけば、DNAあるいは脳幹が行ったもっとも基本的な判断を脳全体が一斉に一瞬にして知ることができるので、その基本方針がはずれることはありません。悪ければ何とかしなくてははいけませんので、そのために行動する。

「不快を避ける」が行動原理になり、同様に「快感を求める」も行動原理になります。この方法は45億年もの試練を経てきているものであり、我々の脳もそれに基づいて進化してきたのですから、今後とも別の方法に変わることはありません。人間が存続する限り、快を求め不快を避けて行動するわけです。

第三章の仏教のところでも説明していますが、このような決まっている法則に従わないとろくなことになりません。今の教育というより社会全体がそうなっているのです。45億年の歴史より今の方が大事と考えるからです。

もはや抽象論では語れない

「神とは何だろうか」というところから検証してみたいと思います。精神という言葉ほど、よく使われていながら、その実体ははっきりせず、これほど抽象的に語られているものはありません。また、この精神という言葉は見えないものだけに便利に使うことができます。

前述した「教育は愛だ」というのもその1つでしょう。教育やその受け皿とされる精神の定義もせずに、ただ、愛で片付けてしまう気楽さが感じられます。根拠のないかわい精神教のありがたいお題目と、同じレベルのものといって差し支えないでしょう。

そのような抽象論で解決した社会問題は未だありません。問題を解決するには、抽象論ではなく、より具体的な方法論をもって対処しなければなりません。そのためには人間の存在には欠かせない、そして教育の根本である精神がいかなるものなのかを確認しなくては、どんなにりっぱな抽象論を展開しても砂上の楼閣となります。

情報→情報処理→行動

これは次のように置き換えられます。

感覚→精神→行動

つまり、精神とは感覚という形で得た情報を処理して肉体に指令を出し、適応行動させるものなのです。

生物の目的は種族保存にある

それでは適応行動とは何を目的としたものなのでしょう。これは、その生物の「種族保存」のためなのです。ただし、何のための種族保存なのかはわかりません。ただ、45億年かかって生物が進化して、現在、人間という進化した生き物が社会をつくっている状況証拠があるだけです。まさに、そこから先は「神のみぞ知る」ということではないでしょうか。

さて、その種族保存のために適応行動をしていますが、なかでも通常1番強いのが「自己保存の欲求」といわれています。これは自己を保存することが種族を保存することにつながるからです。しかし、時には「群のために生命を捨てる」という行動も起こるので

す。

我々は通常、自己保存の本能は種族保存の本能より強いと信じています。誰もが日本のことより自分のことを大事にするのは当たり前といえるでしょう。とくに人間はその傾向が強いようです。このように人間が自己保存が1番と考えるのは本能ではなく理性がなさしめるものなのでしょう。人間の理性はまた大変ずいものなのです。本能は単純に快を求め、不快を避けますが、理性ときたら不快を毛嫌いして何とかして発生させまいとするし、快は無限に求めようとします。このように快と不快のバランスを取ろうとしないのが文明病や自然破壊の元凶です。そして、我々は本能的には自己を種の犠牲にすることがあるのを知っているため、理性では何とかそれを否定しようとします。「お国のために」や「ノブリス オブリジエ」はアナクロニズムと一蹴されてしまいます。国家や国旗さえ罪悪と言いくるめようとします。

幸運なことに最近の脳生理学は精神までも物質のレベルで、ある程度説明できるところまで進化してきました。私のように工学部出身の人間にとっては、実体のないもの、科学的でないものは苦手です。それだけに脳生理学ほど興味深い分野はありません。もちろん、中には精神まで物質に置き換えて説明したら、「人間としての価値がなくなり、ロボットと変わらないじゃないか」との批判もきつとあることでしょう。さらに、「精神のメカニズムを知ってしまったら、感動したり、喜んだり、悲しむといった人間が持っている情緒を味わうこともなくなるのではないか」と危惧する人もいました。

しかし、人間というのは不思議なもので、アポロによって月の石を持ち帰り、古来から文学的な要素のなかで想像していた月が、単なる石ころだらけの荒野だとわかって、相変わらず美しい月を見上げて感傷に浸ったりするではないですか。それと同じように、我々、人間の精神のメカニズムがわかって、人間が変わったりすることはありません。ただ、今まで抽象論をもっともなことのように利用してお茶を濁していた人たちが困るだけのことです。

精神とは情報処理をすることである

当然のことですが、人間は地球から生まれた生物です。地球が誕生して、単細胞が生まれてから、45億年の進化の結果として人間は現代に存在しています。すなわち単細胞生物から人間のような生物へと発展してきたのです。それは単に肉体的な進化だけでなく、精神も発展してきたのです。

つまり、単細胞にも精神の元になるようなものが当然あったのです。もちろん、我々のような精神ではなくて、もっと原始的な精神の雛形というべきものでしょう。単細胞が、ふらふらと浮遊しているときに何かとぶつかる。その情報(刺激)が体内に伝わり、その中にある情報処理器官で情報処理をした結果、「これはエサだから食べ」という命令が発せられる。そこで、肉体は行動を起こし、そのエサを食べるわけです。いわゆる、適応行動をすることです。

これを図で表すと次のようになります。

種族のために「自らを犠牲にする」というと、戦前を思い浮かべて民族主義、軍国主義の復活といったことを連想され、反発する向きもあるでしょう。

反対に、自己や私利私欲を捨てて平和のためにつくすといえ、大部分の人が賛美を贈ります。しかし、それはきれいごとです。心の中では自分こそすべてだと思っています。ですから、同じようにお国のために命を捨てるなどと極端なことをいえば、当然、反発するのです。

ところが、わが子が火事や水難で死にそうになり、わが身を振り返らず救い出し、自分は死んでしまった母親の話などには心の底から共感します。

何故かという心の底から共感できるのは、自分も同じ本能を持っているからです。さらに例えが想像できる現実の範囲だから理解しやすい。しかし、お国のためにも子供のためにも犠牲になれるということの根本は同じです。

その本能の存在を実証しているのがローレンツの名著「攻撃」です。彼は我々に本能を分かりやすく説明してくれます。その一部分を要約して紹介しましょう。

「人間が英雄的な行動をしようとする時、背筋をピンと伸ばし、あごをほんの少し上げ、肘を外に張り出す。これは英雄の顔といわれ、映画で見るナチスの将校の姿である。同時にせすじと腕の外側に聖なるおののきが走る。我が身を犠牲にして国を守ろうとする、この人間の最も崇高な姿を、チンパンジーもするとしたら怒るに違いない。

チンパンジーの群れが危険な敵に出会ったとき、群れを守ろうとする牡はまさに同じことをする。牡は立ち上がり、背筋を伸ばし、あごをほんの少し上げる。これで目の高さを最大にする。視線の高さは、動物の強さを表す。さらに毛を逆立てることで横幅を大きく見せようとするが、チンパンジーの腕の毛は後ろにしか立たないために、肘を横にまわす。これで横幅が最大になる。聖なるおののきとは、背中と腕の毛を逆立てるために神経が働いているから生じる」

つまり、人間に近い動物であるチンパンジーと同じ本能を我々は持っているのです。オリンピックなどで国民の期待を一身に集めて、大試合に臨むとき、選手たちは武者ぶるいをするというのがありますが、これも同じメカニズムなのでしょう。

ローレンツはこれを「熱狂」という本能であるとし、これには並外れて大きな快感が発生するために、権力者に利用されやすいから用心しろと警告しています。そして、さらに自分が熱狂するメカニズムをちゃんと知っておけば、今湧き上がってくる快感が、どのような目的であるかがわかるので、その心配も少なくなると付け加えています。

このように我々が最強の本能と信じている自己保存の本能も、ただ種族保存のためにあるに過ぎないのです。

情報処理の元はDNAである

先ほど述べたように単細胞生物も肉体の中で情報処理活動をする。では肉体のどこですのかというと、遺伝子と呼ばれるDNAでなのです。そのことは、単細胞生物からDNAを取り除いてしまうと適応行動ができなくなることで証明できます。

右図を見てください。

単細胞生物を2つに切るとDNAは片方にしかありませんが、2つとも元の形に再生します。これは肉体が壊れたら、すぐに元に戻ろうとする情報処理する物質がDNAから発生し、常に肉体を駆けめぐっているからです。

次に今切ったものを、もう1度2つに切ります。

そうすると、DNAのある方は何度でも再生できるのです。

ところが、DNAのない方はもうもとの姿には戻れません。これは1度は元の形になれますが、悲しいことに情報処理ができなくなり、餌と毒の区別もつかない、栄養の摂取と排出もうまくいかず、水分も一定に保つことができなくなるのです。もちろん、壊れたところを自ら修復する力もなくなる。つまり、自己保存ができなくて死んでしまうのです。

このことから、

「DNAが種の保存のための情報処理をして、適応行動をさせている」

ということがご理解いただけると思います。

このことは人間も同じです。人間は何十兆という膨大な数の細胞から出来上がっていますが、細胞1個1個が栄養、水分、酸素の吸収、老廃物の排除、細胞の修復、他細胞との調和、細菌との戦いといった自己保存のための適応行動を常に行っています。

また、細胞1個1個は、そして全体としても自分を正しい状態に保とうとしており、これをホメオスタシス(恒常性)と呼んでいます。しかし、人間のように何十兆もの細胞が集まっている動物は、細胞だけ並列していたのでは機能できません。ですから、セントラルコンピュータともいうべき脳幹部がまとめて情報処理をし、各細胞が正しい状態で正しい位置にあり、正しい行動をするように調節しています。従って、セントラルコンピュータというべき脳幹の機能が狂うとホメオスタシスもくるってくるのです。病気を細胞レベルで考えると、細胞が細菌に破壊されたり、炎症を起こす、あるいは酸素や水分が不足などで機能低下を起こしているということになります。その異常をきたした細胞を全ての細胞の統合調節器官である脳幹部が元の状態に戻すように指令を出せば直るわけです。つまり、これも精神です。もちろん、この場合は理性とか本能のようなものではなく、さらにその下のレベルにある情報処理のことです。

『他細胞との調和』『全体としての正しい状態』ということについても少し述べておきましょう。たとえば人間の1つの細胞が「自分のことだけを考えて」勝手に増殖したら、胃だけが巨大になったり、腸が2本になったり、鼻の右側だけが大きくなったり、皮膚がでこぼこになったり、指が6本になったり、とたいへんなことになってしまいます。各細胞が全体の中の一員としてその機能を完全に果たし、かつ必要以上にはならないように、DNAの中に組み込まれ、あるいは細胞が司令を出しています。己の分際をわきまえず、全体のことを考えず、調和を乱し、己だけの利益を考える細胞が現れると全体は無茶苦茶になってしまいます。そして、その細胞は

増殖しようとするでしょう。このため、他の細胞はその機能を侵され栄養や水分酸素を取られ、ついには死んでしまいます。それが限度を越えると人間そのものが死んでしまいます。当然のごとく人間の一員である手前勝手な細胞も死んでしまいます。その細胞を生かしていたのは全体なのですから。これが"癌"です。どうです、地球全体における人間、全世界における日本、社会全体における非行やオタク、家庭における家庭内暴力児にそっくりでしょう。非行、癌、エコロジー等は、このように共通項があるのです。登校拒否や非行を直す方法で癌を直すということが、なんとなく納得できませんか。

DNAが細胞に出すホルモンの働き

ともあれ、単細胞生物が進化して多細胞生物が生まれました。しかし1つ困った事態が発生しました。

先ほどの単細胞生物だと1つの細胞しかありませんから、DNAが指令を出せば適応行動が起こせるのですが、仮に2つの細胞で成り立つ生物が誕生したとします。一方の細胞が餌にぶつかり、その細胞のDNAが情報処理をして食べるように指令を出し、行動をしますが、もう一方の細胞は何も知らないから動こうとしません。しかし、そんなことをやっていたのでは当然エサは逃げてしまい、その生物は死んでしまうことになります。そうならないためにはどうするのか。2つの細胞が共同行動を起こすために、一方が処理した情報を他方に伝えることがどうしても必要になります。

そこで、その指令をある物質が行うようになるのです。その物質がDNAで作った蛋白質で、皆さんがよく耳にする「ホルモン」なのです。

つまり、

「ホルモンとはDNAが細胞に出す行動指令」

なのです。

DNAがアドレナリンというホルモンを出せば、その指令を受けた細胞は逃走し、逆にノルアドレナリンを受ければ攻撃をします

(攻撃的な性格の人はこのノルアドレナリンの分泌が盛んなのです)。

2つの細胞が共同行動をするために、一方のDNAが情報処理して細胞膜を通してホルモンをもう一方の細胞に送り込めばいいのです。これで、多細胞生物でも共同行動を取り、目的を達成することができます。

しかし、もっと多くの細胞で形成している動物はどうでしょうか。ホルモンのおかげで共同行動はとれるようになったものの、この方式では伝達時間に時間がかかり、細胞の数が多くなるほど効率は悪くなるばかりです。細胞が多くなれば大きく、かつ強くなりますが、動きが鈍くては力も何の役にも立たず、その結果種族は滅んでしまいます。

ところが、生物というのはよくできたもので、進化段階の中で多くの細胞が集まるようになると、1つ1つが自給自足をする必要がないわけですから、各々がすべて同じ行動をするのもムダになり、もっと効率的な生命体が登場するようになります。細胞も、人間がたくさん集まったときと同じように分業化が進むわけです。

情報処理に関しては「情報収集」専門の細胞と、「情報処理と指令」専門の細胞が出来上がります。前者が後には目、鼻、耳といった感覚器官に進化し、後者が神経細胞であり、それらがあつまって脳へと進化するのです。

そして感覚細胞で集めた情報を神経細胞で情報処理をして、各細胞にホルモンで指令を送り共同行動させるメカニズムになったのです。

生物の情報処理能力を高めた脳

細胞の分業化となった生物体は、次の段階へと進んでいきます。コンピュータに例えると、ICが増えるほど性能が向上するように、神経細胞もたくさん集まるに従って、情報処理能力がどんどん向上します。

動物が進化し、多細胞化していくと、DNAの情報処理ではとても間に合わないで、ICを増やして情報処理能力を高めたのが脳なのです。つまり、脳は神経細胞の進化した形といえます。

しかし、脳と一口に言っても、その進化の過程により分類されるのです。まず、1番最初にできたのが脳幹です(ただし、神経節は省く)。この脳幹によって、各細胞のバランスを保つようにし、大きくなった身体をうまく行動に結びつけるようにしたのです。また、脳幹部の働きで、外部の状況に対してもより細かく対処できるように進化しました。

さらに進化すると脳幹の情報処理だけでは対応ができなくなり、大脳辺縁系ができ、それでも対処できなくなると大脳新皮質が進化したのです。

これを整理すると、人間の精神はまず、DNAから基本方針が出て、それを脳幹で精密に情報処理し、さらに辺縁系で細分化する。その上に、また新皮質でもっと精密に情報処理するので、まさしく、念には念を入れるとはこのことです(ただし、理性とはこの説明ではまだ単純過ぎるので、後で詳しく説明します)。

これらをまとめて図にすると次のようになります。

DNA → 脳幹 → 辺縁系 → 新皮質

(下意識) (本能) (理性)

これが情報処理のシステムで、精神の構造でもあります。本能と理性は通常「知」「情」「意」の3つに分けられ、その精神の所在を自分で自覚することができます。もっとも、精神を精神として感じる事が出来るのは辺縁系から先の段階で、脳幹部では精神を感じることはできません。

脳幹には五感を通さぬ情報も身体の内部から入ってきます。その情報を処理して血液の成分を一定にしたり、免疫機能を正常に保ったり、さらには内臓を正常に活動させたりする働きがあります。

先に述べたホメオスタシス(恒常性)も、この脳幹に支配されています。病気が直るのも実はホメオスタシスですから、自然治癒力や病気に対する抵抗力は脳幹の機能によるものです。

このように、脳幹は内部行動と外部行動両方の情報処理をしています。言い換えるならば、肉体、精神の両方を支配する重要な役割をしている器官であり、肉体と精神の接点でもあります。つまり、心身症、問題行動、神経症すべてに関係する部分でもあることがわかります。

「人間の行動」という場合の「行動」は外部行動のことで、この行動も筋肉細胞1つ1つの行動を総合したものなのですが、その筋肉細胞は脳の命令で動く。つまり、精神が行動を起こさせるのです。

教育荒廃の原因は脳新皮質か脳幹部か

さて、こうして脳や精神を理解した上で、今騒がれている教育の荒廃ぶりを分析してみると、そのメカニズムもおのずと知れてきます。まず、この教育荒廃はどんな状態をいっているのでしょうか。それは問題行動を起こす子供たちの多発と定義づけられると思います。これまで述べてきたように行動は精神によって起こるので、問題行動は問題精神によって生じます。

では、その問題精神は何故できたのでしょうか。

先ほど示したようにDNA、脳幹部、辺縁系、新皮質といった順番で情報処理のグレードを上げてきています。ということは、より原始的な情報処理をする前段階からの信号を受けているということです。理性を作る新皮質でも、DNAからずっとつながっていないと理性を作ることは不可能です。DNA、脳幹、辺縁系すべてが人間の理性に影響を与えているのです。

DNAの影響についておもしろい例があります。「超男性」と呼ばれるDNAに異常を持つ人が、乱暴でよく犯罪を起こすと言われています。DNAによって理性に悪い影響を与えているのです。つまり、DNAの性格は、そのまま人の性格につながります。しかし、教育というのは新皮質のトレーニングです。問題の教育荒廃が教育の悪さによってもたらされているとすれば、その原因は新皮質にあるといえるでしょう。ところが、心身症、神経症、無気力、無感動、無表情といった症状や登校拒否、非行、家庭

内暴力のような異常行動は、とても新皮質だけでは説明できません。もっと本能に近いものですから、脳幹部に問題があると考えるのが妥当でしょう。

本能という一般的なイメージでは何故か理性に反するものと捉えられがちになっています。もっといえば、悪いもの、低俗なもののように感じている人も多いのではないのでしょうか。しかし、この考え方は「神が人を創った」創造論で進化をまったく無視した考え方です。

これまでも説明してきたように、脳生理学の見地からはDNA、脳幹部、辺縁系、新皮質というように情報が移動しているのは明らかです。新皮質でいきなり理性が発現しているわけではありません。脳幹も辺縁系も45億年の進化の結果、新皮質が発達しても残っているのですから、人間にとっては「必要」なものなのです。このことは本能についても同じことがいえます。

因縁果報の法則

さて、ここで仏教の因縁果報(因果律)について論じてみたいと思います。というのも、この因縁果報で人間の精神と教育が説明できるからです。

因...(内因)[因があるから]

縁...(外縁)[外からの作用により]

果...(結果)[結果が生じ]

報...(報)[習慣力が残る]

これを教育や精神に置き換えると次のようになります。

因...本能を

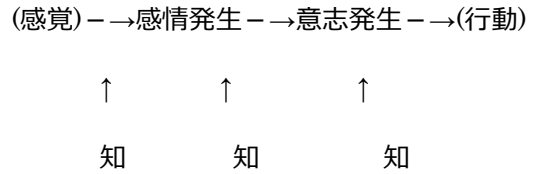
縁...教育して、学習して、トレーニングして

果...理性にし、理解し、

報...感性、ソフトウェア、精神的技術にまで高める

となります。

この精神の部分を具体的にすると、



精神の三要素「知」「情」「意」はこのような形で情報処理をします。

日常性のある例で説明すると次のようになります。

◆「試験でライバルが自分よりはるかにいい点を取った」...目や耳などで外部から入ってきた情報。

◆「それを知って猛烈な嫉妬が起きる」...これが感情発生です。嫉妬は本能の怒りをさらに精密にした不快感です。

◆「その嫉妬で、やる気を起こさせる」...つまり、意志です。

◆「猛勉強をするようになる」...行動。

◆次の試験でライバルをしのぎ、嫉妬が消え幸福になる...目的達成。

つまり、嫉妬という不快感の目的は進歩だったのです。

このように「知」は全ての段階に関わり、その判断によって正しい感情を発生させ、正しい行動を起こさせるのです。しかし、この「知」は時として「我」を作る場合があるのです。このことは後で詳しく述べます。

不快感が小さくなると快感も小さくなる

仕事をやり遂げた、スポーツで優勝した、昇進したなど、そのケースは様々ですが、何かを成し遂げた、目的を達成した時には、必ず、うれしさや誇らしさなど精神的な快感が湧いてきます。そこに至るまでの過程が困難であればあるほど、その達成後の快感は大きいといえるでしょう。甲子園で優勝した、またはオリンピック

報はソフトウェア、精神的技術のことです。正しい報ができた場合が「技術」、間違った報が出た場合は「くせ」になります。つまり、教育の目的は報(ソフトウェア)を創ることにありますが、知育偏重と呼ばれる現在の教育では「果」までで良としているのが現状です。

因果律を教育に当てはめると、「開示悟入」になります。

開(因)...教育をされようと心を開く

示(縁)...教を示す

悟(果)...それを理解する

入(報)...繰り返してトレーニングし、ソフトウェア、感性とする

「教育されようと心を開く」のは本能であり、これがあるから、教育が成り立ちます。これは学習意欲のことです。これがなければ学校に行くこともしないし、学習することはありません。つまり、脳幹の機能低下が起これば、本能も低下し、学習意欲は劣ることになり、当然教育を受けることが困難になるのです。「言えばわかる」理性のレベルでは、何の効果もないのです。

人間の理性の中には「空」と「我」がある

本能をより細かく情報処理したのが理性である、と言いましたが、理性にも2つの側面があります。本能を素直に理性にしたものが「空」で、本能をねじ曲げて理性にしたものが、「我」です。人間がこの地球上で唯一、不合理な存在といわれているのは、理性の中に我があるからなのです。

この情報処理の仕方を図にしてみます。

情報→情報処理→行動

別の形で書くと、

感覚→精神→行動

で金メダルをとった若者たちの感極まって泣き喜ぶ姿を見れば理解できると思います。もちろん、自分の経験を振り返っても思い当たる節があるに違いありません。

そこで、情報処理にこのことを付け加えると、

感覚→不快感発生→意志発生→行動→目的達成→快感発生
となります。

不快感はもちろん誰も嫌なものですから、取り除こうとします。このことから、意志は不快感を取り除こうとする力といった見方もできるでしょう。従って、不快感の大きさに比例した意志が発生し、その意志に比例した行動を起こし、その行動に比例した目的を達成する。そうすれば、その目的に比例した快感が発生するので

このことから、
『快感の大きさは、最初発生する不快感の大きさに比例する』
という定義が成り立ちます。

この不快感はなくてはならないものです。生きていくためには必ず発生します。しかし、好き嫌いと言い悪いの区別ができずに、「不快感は嫌い、だから悪い」ときめつける人たちがいます。挙げ句の果てには「そんな悪いものを子供に発生させるのは可哀想」とまでエスカレートしてしまう。そして、愛で教育は成り立つと思ひ込んでしまい、子供は不快感から隔離されてしまうのです。

するとどうなるか。「使わないものは機能が低下する」ことになってしまうのです。つまり、不快感はどんどん小さくなってしまいます。ということは、先ほどの定義を当てはめると、「不快感が小さくなれば快感も小さくなってしまふ」のです。不快感は快感の側面であり、不快感なくして快感はあり得ないのです。子供を守り過ぎると子供の幸福がなくなってしまうのです。

本能が不快感の発現を求めている

さて、不快感についてですが、不思議なことに人間は不快感を求めているとしか思えない行動をとる時があります。ジェットコースターやホラー映画など、何故、お金まで払って怖い思いをしたがるのでしょうか。

かつての子供の遊びにも、これと同じようなことがいろいろありました。たとえば、夏になると子供が集まってやった肝試しがあります。夜、墓場の近くに何人かが集まって、ある場所に置いてあるタオルとかメンコを取って来るという遊びは、どこの地域でも見かけられたものです。また、男の子だと、川に架かっている丸太の橋を渡るという遊び。これも1つの肝試し、度胸試しで不快感がつきものです。そして、その丸太を渡った者は英雄視され、渡れなかった者は度胸なしとバカにされるわけです。

いわば、自発的に不快感を求めている遊びとしかいいようがありません。しかし、そんな時代も遠くなり、ちょっと危険な場所があると、大人、とくに女親が危険だから取り壊す、あるいは改善せよと自治体などに文句を言う。何も危険なことを奨励しているわけではありませんが、かつては、そういった遊びを子供たちは本能的に求めていたのです。

もちろん、こうした行為にはちゃんとしたそれなりの行動理由があります。子供の場合は危ない遊びをすることによって、肉体のみならず脳のトレーニングをするという重要な理由があるのです。

大人の場合は、本能が不快感の発現を求めているのではないかと考えられることです。

「使わないと機能が低下する」という原則は、むろん脳にも当てはまることですから、それを防ごうとして脳がそういった事態を要求しているのではないのでしょうか。たとえば、老人のボケという症状がありますが、その過程をみると、孫ができて安心した途端とか、心配ごとがなくなってから急速にボケが始まるといわれています。つまり、不快感の発生が小さくなったからでしょう。トレーニングされた脳も、その機能を維持するためには不快感の発生が必要なのです。

愛と徳は本能か、それとも理性か

ここで「愛」と、「徳」についても触れておきましょう。愛や徳は人間だけが持つ理性の素晴らしい特性だと考える方が大部分と思われるのですが、これも本能に属するのです。

先ほどの因縁の法則を用いると次のようになります。

因...本能としての徳があるから

縁...道德教育により

果...道德を理解し

報...道德的になる

これを具体的に置き換えると、

「きれいに片付けたおもちゃ箱をゴチャゴチャにしてしまう子供を叱ると、一時的にはやめますが、しばらくするとまた同じことをする。そこでまた叱る。それを繰り返しているうちに、子供は整理したものを乱すのは悪いことだと知るようになり、過ちを犯さないようになります。そればかりか、整理整頓を自ら心がけるようになります」

となります。報は身につけてしまうと考えれば良いでしょう。

これは子供に因(本能としての徳)があった結果です。因がなければ、いくら縁(トレーニング、道德教育)を与えたところで、果も報もできません。言い換えれば、本能に反する道德教育は成り立ちません。これは、人間はどんなにトレーニングしても水の中では生きられないし、空も飛べません。つまり、因であるエラや羽根がないからなのです。

同様に因果律から次のことも言えます。徳が小さければ大して道德的な人間にはなれません。本能としての徳が小さければ、同じ道德教育を受けても、その目的たる道德的な人間にはなれないのです。近頃の若者の凶々しさはここが原因でしょう。だから、彼らの本能をトレーニングで強化し、道德教育をちゃんとしてやれば、見事に道德的になれるのです。日教組のように道德教育が悪いことなどとたわ事を言う人たちがいるのだから、縁の方にも問題があるようです。

次に愛ですが、我々人間は愛という素晴らしい感情を持っています。愛を悪く言う人はいないし、至高なものと考えています。何故なのか。答えは簡単です。愛は快感だからです。

好き...快感を発生させるもの

嫌い...不快感を発生させるもの

しかし、人間に好いてもらおうとして愛という本能が発生したわけではありません。

動物の進化とは、より良く種族保存を図ることが目的になっています。しかし、進化の過程で新たな本能が加わり、それが今すでにある本能とトラブルを起こすような時は、そのトラブルを防ぐため新しい本能をさらに作り上げなければ種族滅亡となります。おそらく新しい本能を得たがために滅亡した種族もあったことでしょう。

たとえば、鳥が卵を巣の中に産み、雛を育てるようになった時も、このような矛盾が生まれたのです。動物には縄張りを守るという本能が別にあります。この縄張りは自分と自分の家族が生きていくためになくてはならないものです。つまり、縄張りの消滅イコール死ということになります。その証拠に、縄張りを荒らすものに対して強い怒りが発生し、攻撃的になります。その怒りは縄張りの中心に近づけば近づくほど激しくなるのです。

しかし、卵を巣でかえすようになると難しい矛盾が生じるのです。巣で雛がかえたということは見知らぬものが縄張りの中心に突然現れたということです。今までの縄張りを守るという本能にのっとれば、その雛はただちに食い殺されます。ところが、それだと仲間の殺し合いですから、種族は滅亡します。内部抗争は群れを滅ぼす1番の近道です。

そこで、快を求める動物の原理行動を利用して、別の本能を進化させ子殺しを防ぐようにするのです。その本能とは、雛の声を聞いた途端に快感が起こるような本能です。この新たな本能の出現によって、雛を殺すことは快感を失ってしまうことになり、快を求める限り、そのような行為はしないのです。つまり、愛の誕生です。

このことから愛も他の本能と同じように種族保存が目的であり、それが快感によって実現されるのです。さらにいえば、強いものが弱いものを殺さないようにするためであります。

愛と怒りの関係とは

さて、愛が発生する場合は特定少数の相手だけであり、その強さは攻撃のための怒りの強さとぴつたりと一致するはずです。攻撃欲が強ければ相手を殺し、愛の方が強ければ自分が殺されてしまうでしょう。それは女性が好きな「愛のためなら死ねる」ということや、「殺したいほど愛している」という表現もあるぐらいですから、たぶん等価だと思います。つまり、愛と攻撃欲はコインの表裏みたいなもので切り離すことができませんから、優しさのみを求めるといふには無理があります。また、先ほど家族のまわり方を述べたように、愛は特定少数のものにのみ感じるものでなければ不都合が起きます。

たとえば、きれいごとでいわれる「万人を平等に愛する」ことが、もしできるとしたら、家族、恋人、親友など特定少数の関係はすべて崩壊するでしょう。特別な関係がいっさいなくなり、自分の位置すら確認することができなくなるのです。

愛という快感は子供を見たときや恋人を見たときにいきなり発生すると、我々には感じられますが、果たしてそうでしょうか。先ほどの縄張りを守ることと子供を巣で産むことの論理を当てはめれば、攻撃欲と愛は一致しなければいけません。それ以外だと不都合が生じてしまう。つまり、何らかの方法で今、発生している危険な怒りがフィードバックし、愛の発生に関与しているはずなのです。怒りがなければ愛は不必要になります。

これに対して「徳」の方は不快感を避けるメカニズムで種族保存を図ります。

たとえば目の前にいる子供の首を手で絞めたとします。当然、子供は苦しみ悶える。それを見ると瞬時に自分の行為に対する恐怖感、あるいは自分に対する怒りが発生します。この不快感

は、その行為をしている限り続き、子供の苦しみが大きくなればなるほど大きくなります。この不快感を避けるには、行為をやめられない。こうして子供は殺されずにすむわけです。

これが本能としての徳であり、愛やその他の本能と同じように種族保存を目的としているのです。徳は本来、愛と同じく強いものが弱いものを殺さないようにするメカニズムであり、愛との相違点は、それを不快感で行うことと、相手が不特定多数という点です。また、この徳には愛と同じように、攻撃性の強さと同じだけの強さがあるはずですが、これらを総合して考えると、本能の段階では愛も徳も男らしいほど強いこととなります。

男にある3つの基本的な役割

「優しさ」という概念があります。一見優しさとは強さと何の関わりもないように考えられがちです。しかし、優しさとは怒りがもたらす強さが裏付けとなった愛なのです。ところが世間一般でいわれる「優しさ」とは、恐怖がもたらす弱さが裏付けとなった「逃げ」の場合が多いのです。

女性が結婚を対象とした男に、まず優しさを求めます。これは本能的で自然なことなのですが、今言ったように2つの優しさがあることを知っておくことが必要でしょう。その上で男を見極めるようにしなければ、2つの優しさを同列に扱う危険性があります。

まず、男が男であることの役割には3つの基本的な仕事があります。

- 1、女に子供を産ませること
- 2、エサを取ってくること
- 3、家族、群を敵から守ること

前述したように、行動は精神が起こさせるものですから、これらの「男性的行動」は「男性的精神」の強さに比例して行われます。また、これらの行動を起こさせるものになる不快感は怒りなのですから、怒りの裏返しである優しさを女性が結婚相手に求めるのは、本能に忠実な行動であるといえるでしょう。前に述べた3つの仕

事を立派に果たす男は、その優しさを持っているわけですから、そういう男に快感を発生させるのはごく当たり前のことです。

その本能を理性的に置き換えると、金持ちで、地位があって、強くてハンサムで、セックスがうまいということになります。だから、そうした男に魅せられるのは女として当然です。

しかし、金持ちでセックスがうまければ強い男かといえば、決してそうとは言えません。また、地位、顔の善し悪しが男の魅力のすべてともいえないでしょう。

仮に弱い男が強さを装っていたとします。そうすると最初はその男女はうまくいくでしょうが、そのうちに偽装がばれてしまい長続きするものではありません。ただ、弱さ故の優しさなのか、強いから優しいのかはなかなか判断しづらいものです。それは優しさの表現行動が強くて弱くても、それほど大差ないからです。

では、どこで見分けるのでしょうか。それは男の強さの方で見分ければいいのです。もし、強さだけで優しさのない男がいるとすれば、性格異常で犯罪者になるでしょう。強い男のほとんどは、それに見合うだけの優しさを持ち合わせているのです。最近では強さを装う男もいますが、こちらの方は何か事があるときにすぐばれてしまいますのであまりだまされることはないと思います。

男らしい精神を持っていれば、結婚後は家族を最終的には守ってくれるはず。この最終的というのは、男性的な精神が強いことは「英雄色を好む」の例え通り、他にも女を求めるからです。つまり、攻撃欲の強い男は他に女を求めることになるのです。

しかし、そういった男でも安楽の場所は、やはり家庭ですから、最終的には妻や子供のいる場所に戻ってきて、守ってくれるわけです。こういってしまうと女性にとっては勝手な論理と思われるかもしれませんが、歴史上の英雄たちや動物の世界を例にとると、すでに実証済みになっている事実なのです。

第三章 仏教に学ぶ

この章では、あらゆる事象を科学的に捉えるための思考法に導いてくれるという仏教に触れ、仏教から正しいトレーニング、行動をするための教え(公式)を学び、それを我々はどのように利用すればいいのかを検証していただく。

建前論が教育を荒廃させる

私は、この本でトレーニングの重要性を述べております。それなのに宗教である仏教と何の関係があるのだろうかと思われることでしよう。しかし、宮本武蔵が「五輪之書」で見事に仏教を利用しているのをみれば、仏教には何か上達の極意が説かれているように思えません。そうです、仏教は他の宗教と一味も二味も違い、進歩の仕方、トレーニングの方法が「公式」化されている、まことに実用的な「宗教」なのです。

諸行無常

は、仏教が「成り立つ」ための大前提、そしてその土台となります。平家物語に使われたことや「ああ無情」と同じ響きを持つため、「盛者必衰」の意味に受け取られがちですが、無情ではなく無常です。行は仏教でもっとも重要な言葉であり「変化」のことです。諸行無常は、全ての変化は止まらない→全て変化する、の意味です。そう、マルクスやヘーゲルの弁証法の基礎と全く同じなのであり、全宇宙の基本です。

そして、諸行無常を基本とする限り、それは科学を目指しているのであり、宗教とはかけ離れたものです。宗教には神の存在が必要なのであり、神は絶対不変だから神なのです。諸行無常は神の存在を否定しているのだから、それを大前提とする限り、仏教は少なくともその発生において、宗教ではないのではないのでしょうか。神頼みでなく、科学的に生きる道を教えてくれているのです。

進歩というのは「変化」、行動も「変化」、精神も脳による情報処理ですから「変化」といえます。ですから、我々は進歩や行動や

精神に、釈迦という大天才が創造した"変化の法則"を利用しない手はありません。

諸法無我

ここからが仏教の始まりであり、標題みたいなものです。諸法は変化の法則、変化の仕方のことです。無我は自分の思い通りにならない、自分の都合には合わない、という意味です。つまり、諸法無我は、変化には法則、規則があるので都合よく変えられない、ということです。進歩しようと思ったら、その変化の法則をよく知ってうまく利用しなくてはなりません。

この変化の法則、規則に逆らうもの、守らないものが、この宇宙に唯一だけあります。それが、人間の理性です。本能が逆らう場合が神経症ですが、これは意図的にやるものではなく、勝手にそうになってしまう病気です。人間の理性は、それを意図的にやる唯一のもので、この法則に従わない理性のことを「我」といい、法則通りの理性を「空」といいます。空は我でないこと、つまり、「無我」なのです。よく、空と無をいっしょにする人がいますが、それは大間違いで無ではなく無我です。ここを間違えるから、仏教そのものがわからなくなってしまうのでしょうか。教育の定義ができずに教育を語り、非行の定義ができずに非行対策をするのと同じ過ちです。

我は必ず悪いとは限りません。世の中にはお世辞も必要だし、好きな人を嫌って見せた方がうまくいくこともあります。戦術としてはよく使われています。しかし、それを戦略として使うとんでもないことになります。今問題にしている教育のように建前論が本音より正しいとしてしまうと、教育荒廃という結果が出てくるのです。また、我々はトレーニングにも我を用い、本来の能力を超えた結果を出すこともできます。これなどは、人間ゆえになし得ることです。

「空」と「我」とは何か

さて、「空」と「我」について少し触れましたが、ここではもう少し詳しくご説明しましょう。

前章の不快と快感の原理で、ライバルにテストで負けて嫉妬を感じた話を例に取り上げましたが、ここでもう1度そのケースを題材にして空と我の違いを明らかにします。重複する部分がありますが、復習という意味も兼ねて前述したことをもう1度繰り返しながら、空と我の相違について掘り下げていきます。

「試験の点が、自分よりライバルの方が上だったので、猛烈な嫉妬を感じた」

まず、嫉妬は「怒り」の変形で、攻撃するための感情です。この「怒り」は自分ではなく相手に向けられており、相手に対して「攻撃」という行動をとります。ここまでは本能のなせる技で自然なことなのですが、ここから理性の部分に移る過程で2通りの行動が発生します。

1つは「空」の場合。この「怒り」を正しく理性に変えると、そのエネルギーは「勉強する」という行動を起こさせるわけです。そして次の試験でライバルと同等、もしくはそれ以上の成績を上げれば、嫉妬が消えるのはもちろん、心地良い満足感を得ることができます。つまり、嫉妬は「空」で使えば自分を進歩させ相手を傷つけません。

ところが、人間は非常に頭のいい動物なのでいろいろ先のことを見通す力があります。今のケースに当てはめると、努力して勉強するのは長い不快が続くことになるということを知っていますから、その不快を避けようとします。知能が高い故の落とし穴といったところでしょうか。

人間は本来、長時間にわたって強い精神的エネルギーを発生させられる動物です。前述した湿った感情がその能力を発揮しています。それが人間をここまで進化させた大きな要素といってもいいでしょう。しかし、この能力も「楽に不快を避ける」術にたけている人たちの前では無用の長物となってしまいます。この楽に不快を避けることは、自分がレベルアップして嫉妬を消すのが大変だから、相手を自分より下に無理に引きずり降ろして満足感を得る方法です。これにより、正当な「空」の方法で苦労しながら快感を得ることよりも手軽に快感を得て不快を避けることができます。

たとえば、繁盛しているライバル会社を、関係省庁にワイロを贈っていると密告したり、ライバル視していた女が幸せに家庭生活を送っていたら、過去の男性関係をばらすなど、ニュースや映画・テレビドラマに見られるシーンから、相手のマイナス部分ばかりを見て、いい部分をわざと見ないようにするなどのマスコミの常套手段に至るまで、あらゆるところにその要素がみられます。

また、自分一人では優れた相手には負けますが、大勢なら勝てるという方法を取る場合もあります。しかも、それに民主主義の仮面をかぶせて、自分は「いい人」と見せようとする、きれいごとの好きな人に多いようです。このような相手を無理矢理自分以下のレベルに下げる行為をさせるのが「我」としての嫉妬なのです。

さらに悪いことに、こうした「我」としての嫉妬を繰り返しているうちに本音と建前が逆転して、相手を引きずり降ろすことのみが目的となってしまうことも多々あります。実に可哀想な人たちとしか言いようがありませんが、そういった人たちが多いのも事実です。

一方、「空」としての嫉妬ならば、このように相手を傷つけることもなく、自分が進歩できます。このように同じ理性でも「空」と「我」では大きく食い違ってきます。

仏教から学ぶトレーニング方法

仏教には「一切皆苦」という教えがあります。

この「苦」とは不快感が発生することです。常に進歩しようとして行動している人間には必ず「苦」が伴います。ですから、進歩する人間が不快感を発生し続けていることは当然のことなのです。

いかに大きな不快感を長く発生し続けることができるかが、大きな目的を達成することにつながるのです。

言葉を換えれば、「苦」を発生し続けられる人を「意志が強い」「執念深い」と呼んでいます。2つの言葉から受けるイメージは違いますが、根本は同じなのです。

しかし、進歩のために「苦」が必要であったとしても、やはり「苦」は「苦」、不快は不快です。どうしても、その不快を乗り越えずに逃げようとする。弱い人はものに立ち向かう「怒り」より逃げようとする「恐怖」の方が少し余分に湧いてしまうのです。これでは大きなことは成し遂げられません。そこで日頃から「苦」を乗り越えるトレーニングが必要になります。

負荷を次第に大きくしていき、量も増やしていく。つまり、大きな進歩を目指す人は、七難八苦が必要なのです。子供の頃から、大人に「苦」を取り去られた子供は、自分が大人になっても「苦」を乗り越える能力が身につかず「僕の人生こんなものさ」と早くも老境に達してしまうか、シニズムに陥り、進歩を目指して努力している人間を「暑苦しい奴」と冷笑するかになってしまいます。

仏教の解説がこの本の目的ではありませんので、1番使えるような公式を1つだけ考えてみましょう。

八正道

です。この八正道は、「正見」「正思」「正語」「正業」「正命」「正精進」「正念」「正定」の8つがありますが、ここでは「正念」についてだけ述べます。

「念」とは不快感のことですから、トレーニングで進歩しようと思ったら、正しい不快感を発生させなければならぬということです。正念の反対が邪念で、それには面倒くさい、怖い、嫌だ、ごり押し等、または「怒り」が発生すべき時に「恐怖」が発生したり、「恐怖」が発生すべき時に「怒り」が発生するなどいろいろなケースが考えられます。ただ、最後のケースは犯罪の傾向が強く、進歩を目的とした場合は、圧倒的に前者、つまり「怒り」(正念)が発生すべき時に「恐怖」(邪念)が発生してしまいます。面倒くさがり屋とか、アンニュイに浸って動かないとか、人生を空しがっている虚無主義や、「どうせやってもだめさ」というあきらめに格好をつけてみせるシニズムの連中とかは、同じ邪念であっても、それはトレーニング以前の問題です。ですから、ここではトレーニングの最中に発生する邪念をどうするか、どのようにして正念にするかを述べます。

「地面に置かれた幅 30 センチの板の上は平気で渡れる。しかし、それが地上 10 メートルの所に架けられたものなら、なかなか渡れない」

宮本武蔵はこのことを「見切る」という表現を使って説明しています。板が地上であろうと空中であろうと同じことであると見切ることができれば、簡単に渡れるはずで、それならどうすれば見切ることができるのでしょうか。理性で両方とも同じことだから大丈夫と言いついて聞かせればいいのでしょうか。

理性はそれでなんとか満足するかも知れませんが、本能はごまかされません。高い所は本能的に怖いものです。その「恐怖」が「怒り」を上回ったら身体は動きません。しかも、本能的な恐怖が理性を刺激し想像力をかきたてます。「恐る恐る渡ると、真ん中辺りで板が揺れて身体がぐらつく。バランスが取り切れなくなって地上へまっ逆さまに落ちる。頭が割れ、首の骨が折れて死んでしまう」

この妄想が本能にフィードバックされ、さらなる恐怖を生みます。人間の見透す力、想像力、頭の良さが裏めに出てしまいます。この例の場合は、高い所が怖い、という本能的な恐怖が、板を渡る、という目的にとって邪念となっているのです。

人間は、本能が予定していなかったことでも平気でやりますし、やれる動物です。高い所が怖いのは自分の生命を守るための正念ですが、それが今の目的の前では邪念となってしまいます。だから、今の目的を達成しようと思えば、そしてその目的は理性的に考えれば充分可能なことだから、ここはそれ以外の本能にはしばらく引っ込んでもらうことにした方がよさそうです。つまり、目的以外のことに頭をさかないようにすればいいわけです。目的だけを考えればいいのです。

さて、そこで次の展開です。渡ろうかどうかとためらい、思い切れないでいると、いきなり大きな熊が現れたとします。その時、発生した「恐怖」と「驚愕」が、「落ちる」という「恐怖」をはるかに上回り、あっという間に板を渡って逃げてしまいます。

これと同じ状況をできたら人為的に自分自身でつくります。本能を理性に変える時に目的のことだけに絞り込み、その他は理性に変えないようにするのです。目的だけに全神経を集中する。人間はこんなことまでやっつけてくれます。これが「一期一会」です。その

ためには強烈な集中力が必要であり、このような集中力(意志)のことを「正定」といいます。

しかし、このように一事のみに集中するということは、言うにたやすく行方に難し、まことに難しいものです。我々、常人には不可能なものです。そこで、その一步手前の我々でもできる方法を取らざるを得ません。その前にもう1度、我々が行動に至るまでのメカニズムを見てみましょう。

感覚 → 不快感 → 意志 → 行動 → 目的達成

(感) (念) (定)

ですから、正念は正感、つまり、五感(時には六感まで)を正しく使えばよいこととなります。これなら我々常人でもできそうです。

六感を働かせ、重心を取る

ウィンドサーフィンとは抜群の機動性を持つおもしろい乗り物です。そのためにボード(船)は極端に軽かつ不安定にできています。まず、この不安定なボードの上に立てなくては何も始まりません。ボードの上に立つ、という目的のための「正念」を発生させねばなりません。そのためには六根(眼耳鼻舌身意)を正しく研ぎ澄まして使わなければなりません。六根清浄です。行動の場合はとくに目が重要です。

人間は頭がいいから、自分の弱さを人に頼ることにより解決しようとする。海の上でグラグラと頼りなく揺れるウィンドサーフィンのボードにさえ、思わず頼ってしまいます。左図のようにボードの浮力の中心と人間の重心を一直線にすれば安定します。しかし、海面は常に波で動かし、人間もじっとしているわけではないので、人間の重心とボードの浮力の中心がはずれてしまい、そのままではひっくり返るか、海に落ちるかするので身体を移動して中心と重心を合わせねばなりません。

ところが、初心者はこれが逆になり海に落ちてしまうのです。落ちる人を見ると目が下を向いているのがわかります。ボードが傾いたら、その反対方向に腰を移動しなければならぬのに、思わずボードに頼ってしまう人はボードに対して垂直になろうとします。ボードを地面と同じに考えてしまうのです。目を下げて頼りのボードを見ているのです。ところが、重心と中心を合わせるといのは、重力方向に合わせることです。つまり、人間の重心とボードの浮力の中心と地球の中心の三点を一直線にすることなのだから、ボードに垂直になってしまつては、悪い方に、すなわち落ちる方に行動していることとなります。

重力軸、つまり地球の中心方向は必ず水平線に直角になっていますので、目で水平線を睨みつけていれば身体は自然に正しい方向に移動します。この例の場合、下を向いてボードを見ると邪念が発生しますが、ただ顔を上げて視線を水平にするだけで正念に変えることができます。

もう1つ重要なことは、人間の重心の安定です。重心がどっしりと固定されているか、滑らかに動いていなくてはなりません。人間の動きは、各関節を中心とする円運動の組み合わせですから、全体の中心である重心が安定しなくては、ギクシャクしたまじい動きになってしまいます。自分の重心の動きを滑らかにするためには、五感を使ってもなかなかうまくいかないのが、第六感を使います。第六感には超能力、オカルトの匂いがしますが、それは第六感が異常に強く出た場合です。

第六感とは五感(眼耳鼻舌身)以外の感覚で、直接脳神経系に働きかけてくるものです。時間の感覚はまさに第六感です。あるいは眼をつぶって片足で立ちバランスを取る場合は、三半規管が直接重力を感知しているのだから、これも第六感に属するものです。私は東京に行くたびに大井町の戸嶋さんという気功師の所へ寄りますが、ものすごく「気」の強い人で、そこで自分がやってもらったり、見たりすると、この第六感の重要性をひしひしと感じさせられます。

人間の重心は丹田と呼ばれており、膝下丹田といわれているようにヘソの少し下にあるようです。ここを「意識する」ことにより、重心が滑らかに移動します。丹田を意識すれば、重心の動きが

わかるようになるので、それからフィードバックされ、自然に滑らかに動くようになるでしょう。動きのある時はいつも意識の一部を丹田に置いておくことは、言うのはたやすく、行うは難しいことですが、必ずなさねばならぬことです。

普通第六感というのは外から来るものを感知する受動的なものと考えますが、このように能動的な使い方もあります。これにより働きに1番重要な重心の滑らかな運動のための正念を発生させることができます。

強い意志を自然に出す

八正道の最後の要素「正定」は、強く正しい意志のことです。座禅やヨガはこの「正定」のソフトウェアを創るのが目的になっています。つまり、集中力を極端に高めるトレーニングによって意志を強くしているのです。

この強い意志とは、意識しなくても、ごく自然に1つのことに集中できることです。無理に集中するのではなく、スッと集中することができるレベルに達することが必要なのです。歯を食いしばって頑張ったところで、この「正定」の域には到達していません。

我々はとかく、トレーニングさえすれば何とかなると思いがちなのですが、八正道の法則が示す通り、それは進歩のためのたった1つに過ぎないのです。ですから、もし進歩がはかばかしく感じられないようならば、八正道の1つ1つを見直すことが大事でしょう。

このように、仏教には示唆あふれる教え(公式)があり、我々はそれを利用することによって、不快感を正しい意志、行動に結び付けることができます。

2,500年もの長い間、多くの人々の暮らしに生きてきた仏教には、我々の未来にも指針を与えてくれる教えがあることには間違いありません。

第四章 脳幹トレーニングで情緒障害

児を直す

脳幹が衰弱するとあらゆる病気を患ってしまうというのが氏の持論である。その説に沿って考え合わせると、文明病もこの脳幹の働きに左右されているものだというのだ。ここでは、文明病の原因である脳幹の衰弱を捉え、脳幹が果たす諸機能に触れ、その問題点を明らかにしていただく。

脳幹部は内部行動を支配している

私どものヨットスクールに入校を希望して来る生徒に「肌が汚い」「肌に若さがない」「中年のようなブヨブヨとした体つき」「目が死んでいる」といった症状を持った人が多く見受けられます。つまり、若さが無いのです。

あるいは、一時期、当世若者気質として物議を醸した「無気力、無感動、無表情」の三無主義など、我々が若者に本能的に期待するものを持っていない若者が多く見受けられます。

いずれにしても、これらの症状はすべて脳幹の弱さによるものです。従って、脳幹を強くすることによって克服できます。

では、この脳幹は具体的にどんな働きをしているのでしょうか。脳幹は脳の中で1番下位にある脳ですが、ここで精神の基礎(下意識)をつくり、また内部行動の指令を出します。前述しましたが、もう1度、情報から行動に至る順番を図にすると次のようになります。

情報→情報処理→行動

情報を集めるのが感覚器官(目、鼻、耳等)で情報処理するのが脳、そして行動するのが肉体というわけです。

そして行動には、

外部行動

内部行動

戸塚ヨットスクール

の2種類があり、外部行動を我々は一般に行動と呼んでいます。

もう一方の内部行動とは、意識下で内部環境を保つために自動的に行われる行動を指します。たとえば、水分調節、体液の成分調節、体温調節、呼吸や心臓の働き、消化・吸収・排泄、免疫機能、発汗、発熱.....とじつに様々な働きをしています。

動物の進化は自分だけに起こるものではありません。当然の成り行きとして、餌や敵も進化しますからお互いに複雑化する一方です。もちろん、そうした環境変化に対応し、生き抜くためには、情報収集や情報処理をはじめ、それを統括する脳もそれに合わせて複雑になっていかなければなりません。その結果、脳幹だけではとてもまかないきれなくなり、大脳辺縁系、さらに大脳新皮質を進化させて、外部行動のニーズに対応するようになったのです。

一方、内部行動の方はパターンが大体決まっていますから、脳幹部でも充分対応できます。辺縁系や大脳新皮質といった上位の脳で外部行動をまかなうようになって、脳幹部は変化することなく、それらの上位の脳に精神の基礎を与えることのみを役割としているのです。

機能低下で本能、理性、行動も低下する

人間の行動原理は"快を求め、不快を避ける"であるということはずでに説明しました。その行動の基礎は感情の種類で決まりますが、感情の種類は脳幹部ですでに決まっています。脳幹部から分泌されるアドレナリンにより、「驚愕」と「恐怖」が生じ、ノルアドレナリンにより「怒り」が生じ、ドーパミンにより「快感」が生じます。

前述の無気力、無感動、無表情の三無主義の子供たちは、脳幹部の機能低下が著しいためにこうしたホルモンの分泌が少ないのです。そのために表情や精神の働きも乏しくなっているのです。

このように脳幹部において、すでに感情の種類は決まっていますが、この段階では、感情として自己認識することができません。こ

これらのホルモンが辺縁系に到達したときに、初めて情動(本能としての感情)として感じる事ができるのです。さらにそれが新皮質に到達すれば、ようやく人間らしい感情となります。

これを具体的に置き換えると、たとえばテストでライバルに負けたという情報が入ってくると、脳幹はノルアドレナリンを多く分泌し、それが辺縁系にきて怒りという情動になり、さらに新皮質にきて嫉妬という感情になるわけです。それで、この不快感から逃れるために、人間は努力して相手に負けないレベルに到達しようと行動するので。

しかし、この脳幹部の情報処理が狂っていたらどうなるでしょうか。ノルアドレナリンの分泌が少な過ぎると、大きな嫉妬は発生しませんがあまり努力しようとしなくていいし、多過ぎれば、嫉妬が強過ぎて相手を殺してしまうなどということにもなりかねません。さらに、ノルアドレナリンより、アドレナリンの分泌に傾けば、「恐怖」と「驚愕」が生じるわけですから、いろいろ理屈をつけて逃避するようになります。これでは努力など到底望めそうにありません。ましてや処理が狂ってドーパミンを発生するようになれば、負けることに快感を感じてしまい、何とかして人に負けようとするようになるでしょう。

人間の精神、心を支配する脳幹部

人間の精神といえども、下部でこうした原始的な情報処理をしている以上、脳幹の狂いは、そのまま精神の狂いに通じ、人間の行動を狂わせることとなります。我々の扱ってきた子供たちの問題行動は、このようにして生じたものだろうと考えられます。「脳幹は植物脳で行動や精神には関係ない」と思われがちなのですが、これはとんでもない誤解であり、精神の元はここで発生しているのです。つまり、脳幹の機能が低下すれば、本能も理性も低下してしまうのです。

大脳新皮質は単独で働いているのではなくて、あくまで脳幹が作り上げた基本方針に基づいて働いていると考えられます。すなわち、人間の精神は、むしろ脳幹の方が主役であり、大脳はその付属器官という考え方が成り立ちます。

人間が誇る精神、あるいは心は、脳幹部という1番原始的な脳に支配されているのです。そのことを逆に考えると、教育荒廃に伴う、数々の不思議な現象は、この脳幹に問題があるというもあながち否定できなくなるはずで。

先ほどの三無主義、つまり、無感動、無気力、無表情もこの脳幹に問題があるのです。たとえば、感動は強い感情ですから、アドレナリン、ノルアドレナリン、ドーパミンの3種類のホルモンがドッと多量に出ることにより発生します。しかし、脳幹が衰弱していたら、これらのホルモンは充分分泌されなくなり、感動も生まれなくなります。

また、気力は脳幹にある視床下部というところから分泌される、神経ペプチドというホルモンによって作られますから、視床下部の機能低下は、気力低下につながるのです。表情も脳幹から分泌されるドーパミンが辺縁系の線条体に作用して作られるといわれており、その機能低下によって無表情が生まれてくるのです。

異常は脳幹の機能低下によって生じる

続いて、そのほかの問題児の症状についても検証してみます。問題児に多い症状に自律神経失調症があります。この自律神経も脳幹に支配されていますので、当然、問題点は脳幹にあると考えられます。

その他にも小児喘息、若年糖尿病、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎、膠原病等の免疫の異常も、免疫系が脳幹の支配を受けているのだから、脳幹の衰弱によって発病することがあるのは十分に考えられます。

さらに、脳幹の重要な機能であるホメオスタシス(恒常性)が自然治癒力や抵抗力の元と考えるならば、病気になりやすい、病気が怪我が治りにくい、腫れがひかない、すぐに化膿するなどといった症状は、脳幹の機能低下との可能性も否定できません。

この脳幹が精神のモトになっている以上、同じことが神経症と呼ばれる様々な症状にもあてはまるでしょう。

たとえば、嫌なことがあるとすぐに、てんかんを起こす、腰が抜けてしまう、目が見えなくなる、耳が聞こえなくなる、さらには年齢退行する(精神年齢が低下してしまう)などの症状もそうでしょうし、幻聴や幻視などの幻覚、不眠症、過食症、拒食症なども脳幹の低下、あるいは狂いということに充分当てはまりそうです。

つまり、このように問題児の肉体的、精神的な症状は、すべて脳幹機能の低下や狂いとして説明づけられることばかりです。

脳幹機能容量をオーバーするとパニックに

では、何故、文明社会において脳幹機能低下が著しくなったのでしょうか。このことは筋肉に置き換えて考えればわかりやすくなります。筋肉は使わないと痩せてしまいます。細胞は負荷の大きさに応じた機能を持つように変化するからです。スポーツのトレーニングでは負荷を大きくして細胞の機能を増大させます。たとえば、バーベル挙げでは、100 キロを持ち上げる人間に 100 キロの重さのバーベルで練習しても あまり効果が上がりません。105 キロ、110 キロのものを挙げられるように練習してこそ初めてその能力は上がっていくのです。使わないものが痩せてしまうのは動物の宿命です。もちろん、脳細胞といえどもその例外ではありません。

現代社会は、精神的ストレスが過剰になるといわれています。これだけ情報が氾濫し、生活が多様化すると当然のことかも知れませんが、その精神的ストレスが心身症や神経症の主な原因という見解には今一つ素直に頷けないものがあります。確かに量に関していえばその通りなのでしょうが、質の問題では反対といえるのではないのでしょうか。

情報量が脳幹の情報処理能力をオーバーしてしまうとパニックが生じます。このパニックが、肉体的に影響を及ぼしたのが心身症で、精神的な面に出たのが神経症といえると思うのです。ただし、この場合は慢性的なパニックです。脳幹部の情報処理能力が小さいので、通常の生活における情報が常に処理能力を超え

ている状態のために機能のどこかにパニックが生じ、それが本人の弱点に歪みとして表れるのです。

身近なところで例を挙げると、学生の時にのんびりと生活していた者が、就職した途端、それまでとの生活ペースとは打って変わって、時間に追われる、上司にはいじめられる、しかも仕事はうまくはかどらない、などといったことで、心身症や神経症になってしまったケースをよく耳にします。いわゆる五月病です。

ところが、社会生活の中では不快感が発生したからといって、すぐに行動を起こすわけにはいかない場合があります。上司にいびられ、怒りが発生すれば、攻撃しろという指令が出ますが、殴ればクビになるので殴れない。だから、"殴れ"という指令はずっと出っぱなしの状態です。つまり、脳幹はノルアドレナリンを分泌し続ける状態なのです。ノルアドレナリンは覚醒剤ですから、夜も眠れずに脳幹はくたびれてしまいます。

脳幹トレーニングで、機能を正常化する

ストレスというのは不快感のことであり、エネルギーの一種です。「エネルギーは高い方から低い方に流れる」のは常識であり、溜るとは考えにくいものです。また、脳生理学的にも、脳幹から分泌されたノルアドレナリンはやがて分解されてしまうはずで、1度分泌されたものがいつまでも溜っていることはあり得ません。

ダーウインは、人間の感情を湿った感情、動物の感情を乾いた感情と呼びました。動物の場合は、どんなに強い思いが湧いてきても、その目的さえ達成してしまえば、その感情はきれいさっぱりなくなってしまいます。ところが、人間は記憶力が抜群にいいので、課長に理不尽に叱られたことをいつまでも覚えており、怒りは発生し続けます。これがストレスです。ストレスとは元々、我々工学系の用語であり、力がかかりっぱなし状態のことなのです。

人間はこの湿った感情ゆえに、しぶとく、しつこく努力を続け、今のような進歩をしてしまったのですが、逆に湿った感情故にストレスの虜になってしまい、胃潰瘍や不安神経症になってしまいます。

さて、それならストレスにどう対処したらよいのでしょうか。まず、何よりも大切なのは、ストレス等をはねかえしてしまう丈夫な脳を創ることです。同じようにストレスがかかっても平気な人もいれば、すぐに参ってしまう人もいます。私はこのことで一生忘れることのできない苦い経験を持っています。嵐の遠州灘でヨットが沈没し、私ともう1人のクルーは海に放り出されました。1番質の高い負荷がストレスとなって襲ってきたのです。その中で私は生き延び今に至るわけですが、クルーの方は30分たため間に死亡しました。これは脳の情報処理機能のうち"質"の方の問題でしょう。海では百戦錬磨の私と新人の彼との差が出てしまったのです。"生きるか死ぬか"というもっとも質の高いストレスにも私の脳幹は対処したのですが、彼の脳幹は耐えきれずパニックに陥ってしまい死に至ったのでしよう。100キロのバーベルを持ち上げるトレーニングを積んだ人は100キロの負荷がかかっても平気ですが、50キロしか持てない人はつぶれてしまいます。

ストレスを語る時、解決法をさぐるには誰もその量のことばかりを考えます。しかし、大事なはその質なのです。生きるか死ぬかのストレスに比べれば、課長に叱られたことなど、大したことありません。100キロ持てる人に、5キロを1日中持たせたところでストレスによる障害等が生ずるはずもありません。ストレス撃退法は、ストレスをなくすことでも、酒やスポーツで発散することでも、カウンセリングを受けることでも、安定剤を飲むことでもありません。より質の高いストレスに耐え得るようトレーニングをしておくことなのです。その答は脳幹トレーニングなのです。

脳幹機能低下に陥った子供たちというのは、自主性というきれいごとの教育で蝶よ花よと育てられた傾向が顕著で、脳幹トレーニングはまったく疎かにされてきています。かつては子供たち自身の社会の中で自分たちを鍛えていたものを大人たちがしたり顔で、その領域を妨害するようになってしまった現代の社会では、そのような訓練ができないのが現状です。

脳幹機能を高めれば、イライラも解消

さて、今まで述べたパニックは機能の許容量を超えることによって生じたパニックです。従って、その前兆として、脳幹機能低下による様々な症状が出ますが、慢性的なパニックですから徐々に起こり、そして長く続きます。「ワラ1本がラクダの背中を折る」という諺があります。これはワラ1本で折れるはずのない背骨でも、それまでにやっと耐えられる負荷を背負っていたところに、ワラ1本を載せたために、ついに背骨が折れてしまったといういましめです。つまり、何事もよくよく観察してみると、折れるまでにはいろいろなところに、それなりの症状が出ているということです。

このようにパニックには質によるものと量によるものの2つがありますが、どちらか一方のみということはありません。両方が混じっていると考えるべきです。家庭内暴力などで、親に暴力をふるう理由は、ごくつまらぬものです。ちょっと気に入らぬことを言ったとか、物を食べる音がうるさいとか、テレビのチャンネルを変えたとか、勝手に部屋を掃除したとか、とても発作的に暴力をふるうほど、質の高い不快感が発生するとは思えません。これには「ワラ1本がラクダの背を折る」の例えで説明するのが良いでしょう。軽いワラ1本でラクダの背骨が折れるわけがありません。しかし、その前に折れる寸前までに荷を積んでいたら、軽いワラが引き金となって背骨が折れてしまうでしょう。ちなみに日本のマスコミは、ワラを載せた人に全責任を取らせるのが大好きで、真犯人を逃しがちです。

家庭内暴力も同じことで量の問題が質の問題に突如変わってしまうのです。どうやら、質も量もトレーニングをしなければならぬようです。

ストレスによる胃潰瘍、十二指腸潰瘍などが脳幹トレーニングで直るといって、今まで病院や薬など対処療法が全てだと思っていた人にとっては、躊躇するところでしょう。もともとストレス病と思われる向きのあるこれらの疾患にさらなるストレスを加えることになるのではと心配するのも無理のないことかも知れません。しかし、脳幹トレーニングでストレスは溜りません。情報処理をするとすぐに行動に移してしまうからです。

また「イライラ」という不思議な現象があります。これも感情の一種なのでしょうが、他の感情とは少し違うようです。イライラしてい

るときは、簡単に怒りが爆発するので、「怒り」の変形と思いがちですが、イライラ自体は「怒り」ではありません。そこで、私は、「イライラ」は「脳幹機能が手一杯」の合図だと考えています。それ以上情報処理ができないので、もう情報を入れるなという合図なのです。

だから、イライラを解消するには、とりあえずの情報処理を行動に移すか、のんびりできるものなら、のんびりするか、いずれにしてもそれ以上の情報を入れないことが必要です。しかし、1番の良策は脳幹の機能を高めることです。そうすることによって、処理能力が高まり、イライラは通常の生活で起こりにくくなります。

そのためにも、まずハードウェアとしての脳幹機能が重要になり、その上でソフトウェアの問題に対処することが必要です。

人生の様々な目的は精神的快感に含まれる

さて、教育とは子供を変化させることです。その変化は良い変化、すなわち進歩創造を目指しています。どうい変化が良い変化なのかを見極めなければ、つまり、目的地がどこにあるかがわかっていなければ、先生は子供を正しく教育できません。

これは「人生の目的は何か」ということに一致します。哲学や宗教も科学も皆これを目指しているのです。人類が歴史上ずっと頭を悩ませてきたこの大命題も、精神をハードウェアやソフトウェアに分けて考えると、意外に簡単に答が出てきます。人生の目的、生きる目的を挙げてみると、「幸福」「喜び」「地位や名誉」「金」「大きな仕事を成し遂げること」などいくらでも出てきますが、こうした目的は人間にあるものをもたらします。

それは、
精神的快感

です。人間が求めるもの、それはすべて精神的快感が得られるものです。つまり、人生の目的とは、それが何であれ、最終的には、いかに大きく、長い、精神的な快感を得るか

ということ以外に何者も存在しません。つまり、脳幹トレーニングは教育の現場において絶対欠かすことのできない命題といってもいいでしょう。

例えば宝くじで1億円当たったとしても、そのことにより脳幹からドーパミンが充分出なければ、大してうれしくもなく幸福でもありません。人からきれいだねと言われてドーパミンがドツと出れば無上の幸福を味わいます。要は外から入る情報よりも情報処理能力、つまり、脳幹の機能の方が大事なのです。その機能が大きい人は「幸福になる能力」が高いわけです。幸福は何を得るかではなく、いかに情報処理をするかにかかっています。自分がそれほど幸福でないなら、それは自分のせいであり、逆に自分が人を幸福にしてやれるなどと大それたことを考えないことです。戦後民主主義教育は子供に幸福を与えようとして、結局は子供の幸福を奪ってしまったのです。

トレーニングに最適なウィンドサーフィン

病気やケガは細胞が異常になったり、破壊されたり失われたりした状態です。すなわち、治癒とは、細胞が正常に戻ったり、再生されたりすることです。これはホメオスタシスであり、脳幹の機能に属します。従って、自然治癒力というのは、脳幹の機能によるものです。脳幹が虚弱であれば病気が直りにくくなるのは当然の帰結です。

また、ダイエットにも脳幹トレーニングは効き目を発揮します。過食症は脳幹の情報処理が狂って、必要なエネルギーと摂取するエネルギーのバランスが取れなくなった状態であり、拒食症も同じことです。これを、正常に映すためには、そういった情報処理を支配している脳幹の機能を正常化させることによって解決できます。具体的に脳幹をトレーニングする方法としては、より質の高い不快感を常に発生させ、それを乗り越えるようにする訓練があります。

質の高い不快感とは、生死に関わる不快感のことです。そうした危機感が希薄な現代社会にあって、この生死にかかわる不快感は人為的に発生させるしかありません。

つまり、それは人間を殺す方法と同一ということになります。その方法には3種類あります。まず、1つは、鉄砲で撃つ、殴り殺す、刀で切る、放射能を浴びせるなどの細胞を物理的に破壊させる方法です。第2番目は、水の中で窒息させるなどの酸素を絶つ方法です。第3は、エネルギー源を絶つ方法。つまり、断食や断水による死です。

子供の丸太渡りなどは、自ら死に至らしめるような行為を遊びの中に取り入れていたのです。ただ、ホラー映画やジェットコースターなども恐怖感を与えてくれますが、自らの力でその恐怖感(不快感)を乗り越えていく行動がありません。それではトレーニングにはなりません。

そこで、我々のヨットスクールでは人為的に生か死かの状態をつくり、自らがそれを克服するための行動を絶えず起こすような方法を用いています。具体的には先ほどの3種類の中の「酸素を絶つ方法」を利用しています。海に対してはどんな人間でも恐怖感を持っています。その恐怖の核には海では人間は生きていけないという厳然たる事実があるからなのです。つまり、海の中では人間は窒息死してしまうということです。

その海で、ひっくりかえりやすいヨットやウィンドサーフィンを用いてのトレーニングです。海に落ちれば「死ぬ」という本能があります。だから、ヨットやウィンドサーフィンの上に少しでも長いようと努力(つまり行動を起こす)するわけです。

しかも、ヨットスクールのヨットはわざと転倒しやすく作ってあります。また、ウィンドサーフィンはヨットよりも転倒しやすい。ですから、常に行動を起こすしかないので。この絶え間ない繰り返しによって、文明社会で衰弱していた脳幹機能はトレーニングされるわけです。

また、今までのデータを見ると、冬にヨットスクールに来た子供たちが早く立ち直っているという現象があります。これは、寒い冬の海でトレーニングするため、夏の暖かい海よりも気象条件が厳しく、より強い不快感が発生するためです。

さらに効果を上げる方法として「体罰」があります。脳幹を強くする基本はヨット、ウィンドサーフィンによるトレーニングですが、その訓練を強制させるために体罰が効果を発揮するのです。この体罰によって子供たちは恐怖感を覚え、トレーニングせざるを得ない状況に追い込まれトレーニングに打ち込むこととなるわけです。これは体罰無しより効果を上げます。

とくにヨットスクールに入校する多くの子供たちは通常の社会生活を営めなくなった重症児です。口で指示だけでトレーニングするような生やさしいものではありません。彼らには体罰によって恐怖感を与え、こちらの方が絶対的に強いということを認識させたいのでトレーニングを行うようにします。この時の体罰がなければ、彼らは言うことを聞かなくてもありませんし、逆に聞くような子であれば、入校するほど情緒障害は悪化していないでしょう。

この体罰の効果は、行っていた時と現在のように行わなくなった場合とで比べると顕著にその差が表れます。体罰が存在した頃は、どんな障害児でも3ヶ月もあれば直っていましたが、今では半年、1年を要してもなかなか良くならないケースもあるほどです。体罰があればすぐ直るのに今ではまったく効果の上がない例もあります。

体罰を非難する人の多くは、「暴力で強制的に訓練している」と言いますが、本当に体罰がどんなものなのかを認識しているのでしょうか。体罰と暴力は根本的な相違点があります。暴力は単に肉体的な痛みを与えるのに対し、体罰はその名が示す通り、痛みという罰を与えることにより技術や礼儀を教え込む1つの有力な方法なのです。つまり、暴力は自分の利益のためにするものであり、体罰は子供の利益のためにするものです。目的がまったく違うのです。

この点を認識せずに、的外れな批判をしているのは、悪しき戦後民主主義の幻想を鵜呑みにして、それを信じ込んでいるきれいごとばかりの人たちなのです。そんなきれいごとでは、情緒障害児の置かれている厳しい現状を改善することは100パーセント不可能でしょう。

言い換えれば、多くの権威者が言うように、理性では直しようのない問題がこれら情緒障害児(本当は情動)の問題なのです。し

かし、今でも「教育は愛だ」とありがたいお題目のように唱えるマスコミ、専門家諸氏がいます。そして結果はどうかという直っていない。それでは何のために専門家であるのかわかりません。

情緒障害児の問題は、日本の行く末にも大きく関与してくる問題だと私は考えています。そのためには、1人でもきれいごとから目を覚まし、本質を見極める「大人」たちが出現してほしいところです。それが無い限り、この問題の解決は絶対にあり得ません。

あとがき

情緒障害児は文明病である。いわゆる先進国に多発しており、その他の地域ではほとんどない。中でも、日本ほど障害児の数が多い国はないであろう。我々は、まずこの日本の現実をしっかりと受け止めねばなるまい。もはや、日本お得意のアメリカ頼りは役に立たない。今こそ、日本が世界に先駆けて情緒障害児の原因究明、そしてその克服に道を開く時が来たのだ。

この問題に対する私なりの解答として、本書で「脳幹論」を提唱した。先日テレビで、NHKラジオの「子供と教育相談室」でおなじみの河合洋氏が、私の脳幹論に触れ「荒唐無稽である」と、荒唐無稽な言説を繰り広げていた。彼は私の著書を読んだこともないと思われるが、自分の立場に固執するならばそう言わざるを得まい。自分の立場を不動のものとする、まさに天動説はこのことだろう。

有名な多くの「専門家」がいる。専門家とは、問題解決能力を有する人のことではないのか。しかしながら、社会問題とは解決策がないから社会問題なのであり、解決策があれば社会問題は生じない。つまり、社会問題の専門家とは矛盾した存在であり、本来はいないはずなのだ。ヨットスクールの成果には、ご存じのように様々な批判や中傷が加えられた。「学校に行くようになったから」といって、どうして登校拒否が治ったことになるのだ」という見当は

ずれな批判まであった。そして、こうした言説をまき散らした多くの人は専門家と称されている。さすが専門家だ。

権利と義務は一体だ。子供の権利を認めるのならば、彼らに義務を果たさせる責任も、大人にはあるはずだ。片手落ちでは、教育はかえって逆効果になる。しかし、現在の教育現場には、子供が権利ばかり主張したとしても、それをいさめられる雰囲気はない。例えば、先生が「問題」と称せられる事件を引き起こしたときの、あの教育委員会をはじめとする管理者側の態度は何なのだろう。部下をかばってやろうとせず、あろうことかマスコミや日教組といっしょになって、当事者の先生を攻撃する。これでは、子供に義務を教えることもできないし、子供も周囲の大人のこと無かれ主義を見習うだろう。

マスコミも「反権力」を標榜するなら、教育委員会やその統括省庁である文部省を攻撃するべきだし、対する文部省も堂々と反論すべきだ。為政者がのらりくらりと、自分に害の及ばぬことを第一に考えた言葉を並べ立てていては、教育は成り立たない。子供の本能はそんな卑怯者たちの言質に、言うことを聞く必要性を見出せるはずがない。

そう、日本の男の弱さ、そして無茶苦茶な日本のマスコミが教育を駄目にしてきているのだ。しかし、そういった権力を行使する力量のない者に権力が与えられているのだ。弱い者ほど、武器を与えられるとやたら使いたがる。何故なら、周りは全部自分より強い敵だからである。しかし、我々が断固としてマスコミに立ち向かえば、マスコミだとて変わらざるを得ない。マスコミを正常化しないことには問題の根本的解決はない。

私の脳幹論はハードウェア論、戦略論であり勿論これだけでは役に立たない。ソフトウェア論、戦術論と合わせて初めて効果を発揮するのである。しかし、「戦略のミスは戦術では補えない」と言われるように、まず必要なのは戦略論の方なのだ。情緒障害児に関する「専門家」の意見は全て戦術論にすぎないのがわかるだろう。彼らは戦略論に思いやらないのではないのか。情緒

障害の本来の意味を理解していないのではないだろうか。そういえば、この頃、情緒障害という言葉あまり使わないようだ。

日本では何故か権力者に義務、責任を要求しない。現場の人間はたまったものではない。事故や事件は現場で起こるに決まっているのだから。我々の「事件」についても現場に全責任を負わ

せずに、是非、真犯人を見つけて責任を取らせてほしいものだ。マスコミか文部省か名古屋地検か裁判所か家庭か。彼らは重要な犯人である。しかし、突き詰めていくと1番重要な犯人は「日本の男」——そう我々になってしまうことだろう。

1992年7月15日

ホームページ掲載にあたりご協力下さったフローラル出版に厚くお礼を申し上げます。

なお、本著は1992年発刊です。